



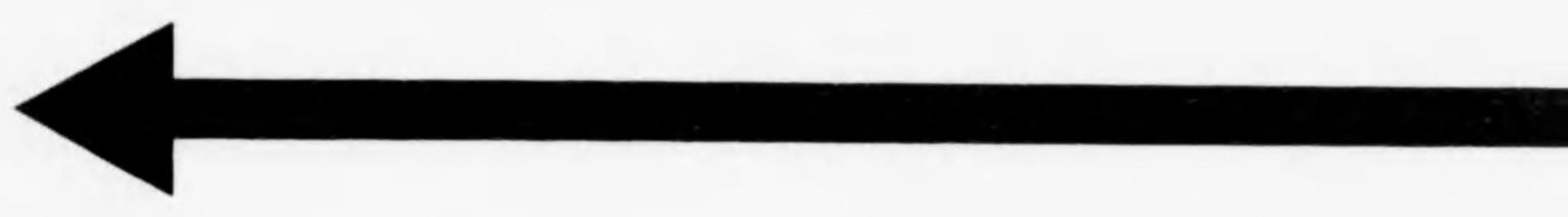
特274
691

陸軍中將 佐藤清勝述

神道より觀たる佛耶二教

財團法人
日本神道學會
神道學會
獎學

始



特274
691

神道より觀たる佛耶二教 目次

緒言

第一章 佛敎の梗概

第一節 佛敎の創始及び変遷

第二節 佛敎創始前の印度宗教

其一 ウエータ敎

其二 プラーマ敎

第三節 原始佛敎の敎義

其一 四諦

其二 三學

第四節 小乘佛敎の敎義

其一 小乘經典の結集

其二 緣起論

著者寄贈本

(一)

(三)

(三)

(六)

(六)

(一〇)

(一〇)

(一〇)

(五)

(一九)

(一九)

(三二)



其三	實相論	(二二)
其四	修道法	(二四)
第五節	大衆佛教の教義	(二七)
其一	大衆經典の成立	(二七)
其二	龍樹の實相論	(三〇)
其三	世親の實相論	(三三)
其四	馬鳴の實相論	(三四)
其五	龍樹の緣起論	(三七)
其六	世親の緣起論	(三八)
其七	馬鳴の緣起論	(三九)
其八	龍樹の修道論	(四三)
其九	世親の修道論	(四五)
其十	馬鳴の修道論	(四六)
第六節	支那佛教	(四九)
第七節	日本佛教	(五一)

其一	空達の概要	(五一)
其二	天台宗	(五四)
其三	眞言宗	(五六)
其四	浄土宗	(五八)
其五	浄土眞宗	(六〇)
其六	禪宗	(六〇)
其七	法華宗	(六一)
第二章	佛教に對する批判	(六三)
第一節	神觀	(六三)
第二節	靈魂觀	(六五)
第三節	世界觀	(六七)
第四節	人生觀	(六八)
第五節	道德觀	(七〇)
第六節	批判の綜合	(七二)

第三章	基督教の梗概	(七三)
第一節	基督教の創始及び変遷	(七三)
第二節	猶太教の教義	(七八)
其一	猶太教の聖典	(七八)
其二	エホバ	(七八)
其三	救世主及終末論	(八〇)
其四	民族意識の高潮	(八二)
第三節	基督教の教義	(八三)
其一	基督教の聖典	(八三)
其二	ゴッド	(八七)
其三	三位一体論	(八八)
其四	原罪論	(八九)
其五	人類愛の高潮	(九〇)
其六	義務及犠牲の高潮	(九三)
其七	神國	(九四)

第四節	基督新教の教義	(九五)
第四章	基督教に對する批判	(九七)
第一節	神觀	(九七)
第二節	靈魂觀	(九九)
第三節	世界觀	(一〇〇)
第四節	人生觀	(一〇一)
第五節	道德觀	(一〇二)
第六節	批判の綜合	(一〇四)
第五章	我觀神道	(一〇六)
第一節	神觀	(一〇六)
第二節	靈魂觀	(一〇八)
第三節	世界觀	(一〇〇)
第四節	人生觀	(一一一)
第五節	道德觀	(一一三)
第六節	政治觀	(一一五)
結論		(一一五)

神道より觀たる佛耶二教

佐藤清勝述

結 言

予は日露戦争の際に於ける劍電彈雨の中に於て信仰を得たのであるがこの時の信仰は未だ不完全なるものであつた、戦後信仰の對象として神を信すべきか佛を信すべきか將たゴツドを信すべきかに就て迷ひ十數年を費して佛教を探究し數年を閲して基督教を討究し何れも心の満足を得ず遂に神道に歸依して天照大神を信するに至つた。

斯様なる研究の結果予は明瞭に予が常に抱懐せる國家主義に立脚して佛耶二教に對する明瞭なる概念を得て是の兩教を批判の對照となし得たのである。

然しなから八萬四千卷の經典を有する大小乘の佛教莫大なる新舊の聖書を有する基督教の教義を短時日の間に於て其概要を述ぶることは容易の業ではない予は其の根幹を失はざらんと努むると同時に枝葉を拂らひ繁雜を避けたのであ

るが、斯くすれば動もすれば教義の面目を失ふの嫌ありて頗る取捨に迷ひ爲の
に屢々稿を改めたのであるが猶ほ是等宗教の大綱と教義の要点を失せざらんこ
とを恐るものであるが漸くにして略は満足し得るものを作成したのである。

是等二教の批判に關しては固より予か有する獨自の意見である予は自己の抱
懐する國家主義の見地と予か信仰する神道の立脚点より該二教の批判したので
あるが而かも我國神道に就ても予は其の觀方に於て現代の諸家諸先生の講ぜら
るゝものと必ずしも總て一致するものでないから従つて斯様なる觀點に立つ予
の批判が必ずしも諸家の意見と一致するや否やを保し難いものであるが而かも
是れ予か獨自の意見として聴取せられんことを望むものである。

然しなから宗教の生命は信仰に存する敬虔眞摯なる感情に存し決して冷靜な
る理智や教義の理論ではないのである是れ即ち信仰の自由を尊ぶ所以である、
それ故に宗教上の問題に關しては常に獨自の意見の存在するものであつて予か
佛耶二教に對する批判の如きも亦た然りである、唯た予は自己の立脚点自己の
觀点より成し得る限り公正に且つ率直に批判せんことを努めたのであるが然か
も宗教に對する批判は萬人愚様であるべき性質のものであるか故に是の点を諒

解し且つ是の批判により神佛耶三教か如何なる相違点を有するやか明かとなれ
ば望外の俾である。

第一章 佛教の梗概

第一節 佛教の創始及び変遷

佛教は印度の覺者釋迦の創始したる宗教である。従つて印度の有したる思想
が多分にその中に包含せられて居る。従つて佛教を理解せんにはその以前に印
度に存在したるヴェター教及びブラーマ教の教義に通じなければならぬと同時
に是等宗教發達の経路を知らねばならぬ。

抑も印度「アーリヤ」族が西紀前二千五百年頃中央亞細亞より「ヒンヅ」
「シユ」山脈を越えて印度の「パンヂヤフ」地方に侵入したる時に於ける「ア
ーリヤ」族の信仰を自然を神格化する諸神を禮拜し祭祀したるヴェター教であ
つたヴェター讃頌歌がその經典であつた而してこの「アーリヤ」族が「パンチ
ヤブ」地方から「ガンガ」河の上流地方に移住蕃殖したる西紀前一千四百年乃

千年頃の時代に於ては畏の「ウエダー」の信仰を基礎とし而かも宗教的形式たる儀式祭典を以て寧ろその生命としたる「ブラーマ」教が成立した而して「ブラマナー」(梵經)かその經典であつて畏の經典の大部を儀式や祭典の形式及種姓の職別等を規定したるものであつた然しながら斯の如き儀式祭典の形式のみを置きを置く事を以て人は満足しなかつた爲めにこの「ブラマナー」の哲學的思想を発現するウパニシャットが次で出来上つた、而して萬有は神の支配であつて神と世界とは別個の存在ではなく萬有は即ち我が有する心であると言ふ唯心論的萬有神教の哲理に到着した。

斯様なる唯心的萬有神教の哲學がその後更に六個の分派を出し六派哲學を出しブラーマ教の主義を継承して儀式祭典に理有を附加したるものやブラマンの萬有神教に理由を附加したるものや或は論理學を主としたるものや或は修道法を主としたるものや或は哲學を主としたるものやを生じた而してこの中に於て最も重要なものは「サーンクヤ」(數論派)の哲學であつた畏の哲學は「ウパニシャット」の思想により一轉して物と心との二元論的思想を生し再轉して哲學上の無神論となつた。

上記のサーンクヤ(數論派)の無神哲學と同一系統の哲學を根據とする佛教が興りて從來の非傳道的宗教を傳道的となし且つ各種々姓の階級を超越し衆生の濟度を目的として實踐道德を高唱するに至つた畏を創始したるものは釋迦であつて皇紀一七六年に歿した。

佛教はその後大に弘通し隆盛を極め且つ中央亞細亞に傳播したが、西紀後五百年頃佛教は印度に於て全く衰微し却つて「アフガン」國「アニシヤ」王の信仰により中央亞細亞に於て隆盛を極めたがその後幾もなくして衰微した。

支那に於ては後漢の明帝が永平八年(皇紀七二五年)に蔡愔等を西域(中央亞細亞)に遣はし佛教を求めしめ同十年蔡愔等は經典を得て歸り洛陽のほとりに白馬寺を建設した、是が支那に於ける佛教傳來の始めである。爾來三國時代を経て晋時代に至り漸く隆盛となり南北朝時代を経て隋及び唐に至り隆盛を極めたが宋時代より漸く衰微し元時代に於ては佛教の一派たる喇嘛教隆となりたるも明時代に於ては全く衰微し清時代に於ては遂に畏を信するものなきに至つた。我國に於ては欽明天皇の十三年(皇紀一三二二年)百濟佛像及び經論を獻したるを傳來の始めとし爾來韓及び隋唐の僧侶の我國に歸化するもの多く主とし

て三論、成實、俱舍等の諸宗を弘通し奈良朝時代に至り漸く隆盛となり大佛の
鑄造、圓分寺等の建造となり平安朝時代に於ては最澄、空海等の入唐後天台眞
言の二宗を傳へて隆盛を極めたがこの佛教は主として貴族豪族間の宗教であつ
たが鎌倉時代に入り法然は浄土宗を眞覺は眞宗を日蓮は法華宗を創始し、又支那
より臨濟曹洞の二宗を傳へて佛教は下級民間に弘通普及し日本佛教となつたの
である。

第二節 佛教創始前の印度宗教

其の一 ヲエーグ教

印度アーリア族が舊居中央亞細亞の高原を去つて印度の西北部に移住し來り
牧畜耕作に従事して居つた時には自然崇拜者であつたのである。即ち自然の威力
を一人格的の神と信し讚誦祈禱を以て是に對し供物咒法を以て加護を乞ひ災
禍を免かれんとしたのである。是の自然の神に對する讚頌歌を蒐集したものがウ
エーグと稱するものである。

ウエータに據れば宇宙を天空地の三界に分ちその各々十一神合計三十三神を
配し例へば天界には「ヂヤウス」神（光空神）、「ウシヤス」神（暁天神）、「ス
ーリヤ」神（太陽神）等があり空界には「インドラ」神（雷神）、「ルツドラ」
神（暴風神）、「マルツ」神（雨神）、「ワーユ」神（風神）等があり地界には「ブ
リテグ」神（地神）、「アグニ」神（火神）、「ソーマ」神（酒神）等の如
きがある。而して是等の神に對して讚頌の歌を捧げたのであつて、是等諸神の性格
は頗る朦朧漠然たるもので互に融通混交せられ一の神に向つて祈願讚頌を捧く
るときは専らその神を無上の地位に推し上げ他神あるを忘却せるが如き有様
であつた。即ち所謂更替神教的のものである。然しなからその間に至上神を立て
て一切のものを統一せんとする一神教的の傾向も顯はれて居つた。

ウエータの讚頌歌には神を崇むると共に人の靈魂をも認めこの靈魂は人の
死後肉体を離れ亡霊となつて頗る遼遠なり天國に向つて旅行をなし遂に是の天
國に到つて現世の肉体を受け再生して天國にある。「ヤーマ」神の保護の下に
光明ある幸福ある無上の生活をなすものと信せられた所謂極樂世界である。而
して現世に於て悪事をなしたものは天國に行くことが出来ないと考へられ未だ

明瞭に地獄に行くとは説かれて居なかつたけれども地獄説の萌芽を見得るのである。

其二　ブラーマ教

印度アーリヤ族が印度西北部より東南「ガンガ」上流地方に移動蕃殖した時「ウエーダー」教の思想を著しく変化を受けてブラーマ教となつた。是れ「アーリヤ」人の領土擴張と共に彼等部族相互の間に又は彼等と土族との間に抗争戦争が始まり而して武運の長久を得んとするには祈禱を行ひ呪法を修するを以て最上の方法としたのである。

是に於てブラーマ教の僧侶は瘡まゝに供養祭典の方法を煩雜複雑ならしめ常人の窺知すべからざる暗晦のものとなし宗教の大本は是等の儀式を行ふにありとし祈禱を以て宇宙一切の根本となし僧侶の呪法如何によりて諸神も左右せらるゝとなすに至つた。換言せば供養は現世界及び他世界に維持せるもの及び潜在するもの又生物及び無生物を動かし得るものであると考へられたのである。供養儀式は是を全体として恰かも各部分皆相互に調和適合せざるべからざる機

械の如く或は一個の環すら疎除するもその用をなさざる連鎖の如く或は天界に達する一段一段の階梯の如く見られ決してその一部の變更簡略をも許容しなかつた。又この儀式は永劫より存在するもので最上神より始まり宇宙の創造も亦最上神を以て「ブラーマ」神の行ひたる供養の結果に外ならずとなした。

要するにブラーマ教はウエーダーの思想を全く儀式化、形式化したものであつて儀式を宗教の大本となしたる思想である。

又ブラーマ教は人の死後に於ける靈魂は再生流轉するものとなした。即ち善を行ふたものは死後善生を受け悪をなしたるものは死後悪生を受け遂に禽獸となり再生すと説く。是を輪廻の説と稱するのである。而して再生の源はその現世に於ける「業」。即ち善悪の行爲であつて善をなしたるものは天國即ち極樂に生る、けれども悪をなしたるものは那洛に至りて種々の苦患を受くるとなすものである。是を業説と稱するのである。畢竟是の説は地獄極樂説の基礎をなし且つ同時にその輪廻説の根源となり遂に是を自明の理となしたのである。

ブラーマ教は主として儀式祭典を重んじたものであるがその中に存する哲學的思想を是をその奥義書たる「ウパニシャット」に於て見ることを得る。即ち

「ウパニシャット」の思想は萬有は神の一部分であつて神と世界とは別個の存在ではない。「ブラーマ」即ち萬有は心中の我であつて地よりも大に空よりも廣く此等一切の世界よりも大なるブラーマ（梵）は即ち「アイトマ」（我）であるとなす所の唯心的萬有神教の思想である。而して是の間に汎神論、觀念論實在論等宇宙觀を包蔵し輪廻說解脱說等印度特有の人生觀を述べたものである。

第三節 原始佛教の教義

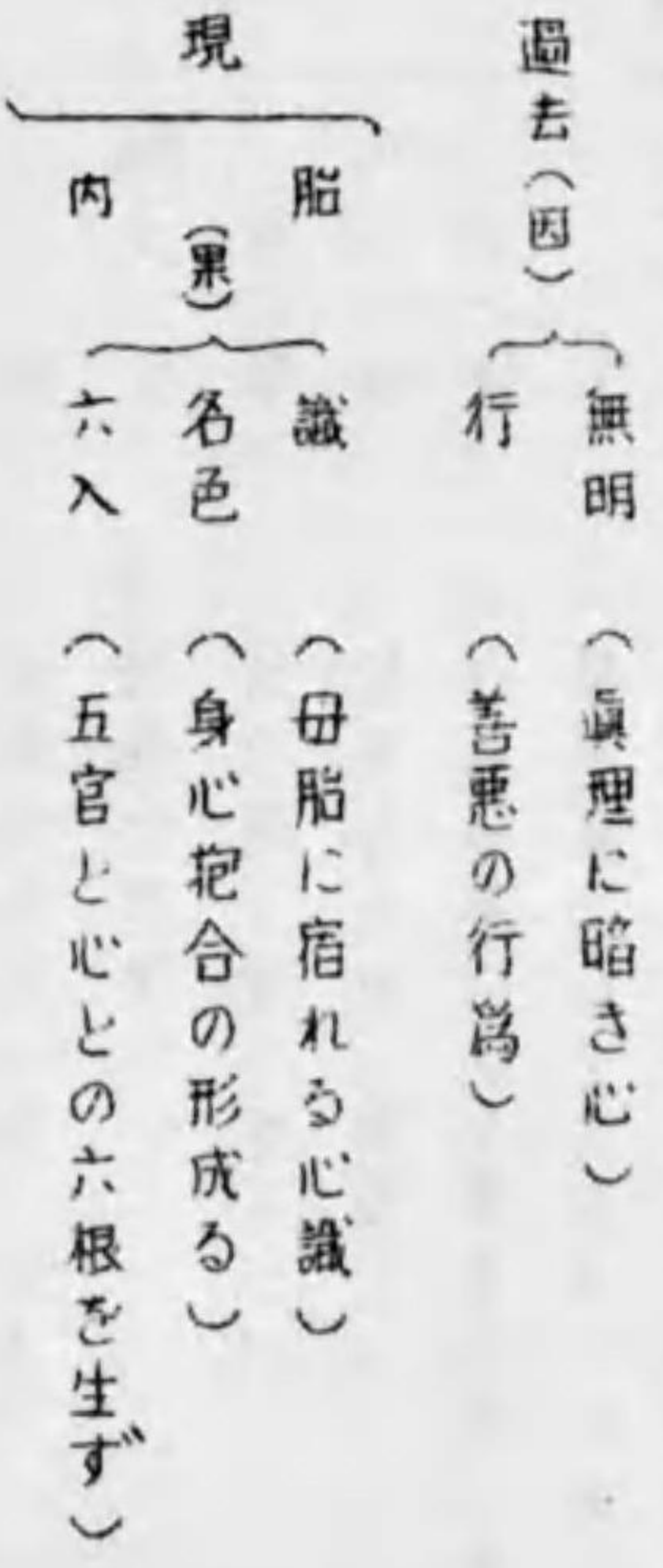
其 一 四諦

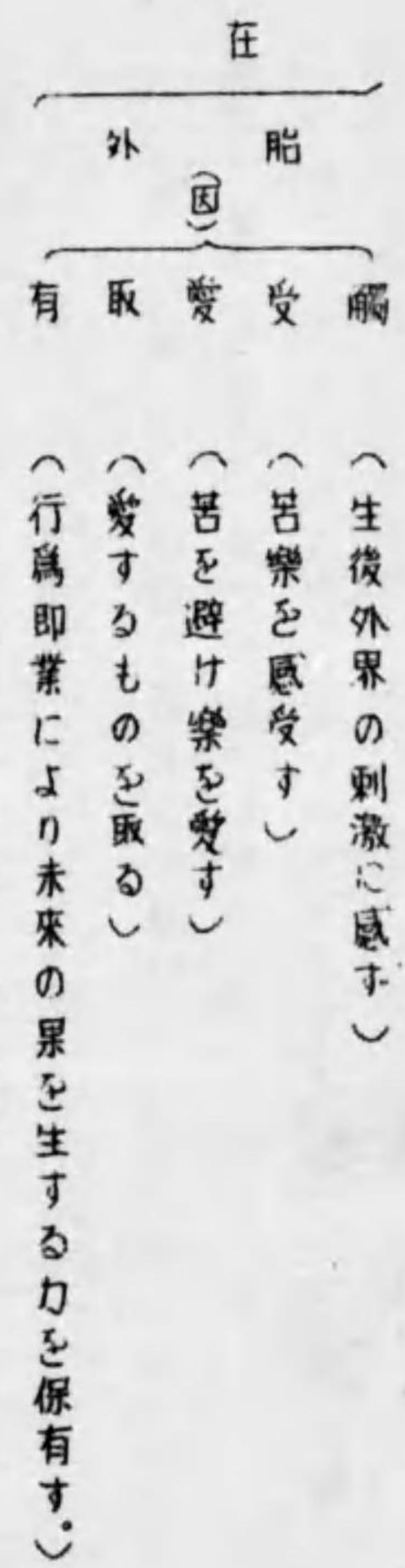
佛教の創始たる釋迦は西紀前五六五年（皇紀九六六年）中印度のカピラ城主スット、ボータナ王（淨飯王）の太子として生れ後出家して大悟しその大悟を教義として布教に努め西紀前四八五年（皇紀一七六六年）歿した。

佛教は「ウパニシャット」の思想及び六派哲學の思想より脱化しブラーマ教に對して宗教的改革をなしたるものであつて釋迦は四個の眞理を説破し是によりて衆生を濟度せんとしたものである。四個の眞理とは、第一苦惱の眞理（苦諦）

第二苦惱成立の眞理（集諦）第三苦惱解脱の眞理（滅諦）第四解脱に導く道の眞理（道諦）であつて佛教に於て「法」と名づくるものである。

釋迦の世界觀は無常である。無常と言ふのは經驗世界は總て因果關係によりて移り行く変化である。是の変化の生起は唯與へられたるものであり、始源なく續き來れる因果關係の一系列に過ぎないと見るのである。従つて是の変化を常に無常であり是か與へられたるものであるとするのである。従つてその人生觀は人生は總て苦惱であるとするのである。生苦、病苦、老苦、死苦、何れも苦であるとするのである。是か第一眞理たる苦諦である。是の苦惱の根原は因縁であつて十二を數ふるのである。十二因縁とは左の如くである。





未來(業) 生 老死
 (前の識より生ずるまでの間)
 (生後死に至る迄の一切の感業)

斯様に過去の因は現在の果となし現在の因は亦未來の果となる斯の如く因果は循環して來るものである。即ち業の因によりて生の果を生じ人として生ずるのは前生に於て苦の因をなしたから現在に於て苦の果を得るとなすのである是が第二の眞理たる集諦である。

上記の如く苦諦集諦の二諦によつて苦もその因て來る所以とが判明したので更にその二諦から脱却する方法を示したものが滅諦である。人か苦しむのは無明執着、業、苦果の順序によつてそれぞれの原因を持つて居るものであるから苦を滅するにはその原因である業を滅す必要があり、業を滅すには執着を滅す必

要があり、執着を滅すには無明を滅す必要がある。無明を滅すには世界の眞相に徹して本來無我と觀することであらねばならぬ。本來無我と觀すれば執着を生ぜず、従つて業も苦果も生じない是れ滅諦である。この境地に達したものを阿羅漢と言ふ。

次に解脱をなすには八の正しき道を行ふべしと教ふるのである。八正道とは左の通りである。

- 正見 (正しき見解) } 慧
- 正思惟 (正しき意志)
- 正語 (正しき言葉)
- 正業 (正しき行爲) } 戒
- 正命 (正しき生活)
- 正精進 (正しき努力)
- 正念 (正しき思念)
- 正定 (正しき沈潜) } 定

是は世間世俗の慾求快樂を追求する快樂主義を斥けると同時に當時ブラーマ教

の唱道して求道の第一義となす苦行をも存けて正しき中間の道即ち聖道を行ふことを教ふるのである。而して正見、正思惟は智識によりて是を求め正語、正業、正命は道徳的實踐的戒律であつて正しく行爲することを教へ、即ち悪行爲から離るゝのであつて、正精進、正念、正定は禪によつて心を靜平にして沈思冥想をなし是によりて解脫に達せんとするのである。是が第四の眞理たる道諦である。

佛教の教理は上述する處に盡きて居るが人が修行によりて解脫し而して最後に到達し得たる境涯を涅槃と稱するのであつて涅槃は神人の達し得る最高至上の理想的境域であつて釋迦は實踐してこの涅槃の境域に達し得たものであるから釋迦崇拜の中心となすのである。

然しなから修行によりて涅槃の狀態に達することが出来なかつたものは再び苦の世界に生れ來りてその前世の「業」を滅せねばならぬとするのであつてブラーマ教の輪廻説を繼承するものである。

佛教の經典は道徳上の訓戒古傳説及び比喻に富み無私、寛仁、愛憐、慈悲報恩を説けるものである。而して佛教が世界的宗教として多数の信者を有したるは實に釋迦の偉大なる人格とその溢るゝ仁愛慈悲の心、衆生濟度の志によるのである。

ある。

其二 三學

釋迦の修道法は八正道であるがその布教中多くの弟子を生じ、是等の爲めに細部の修道法を説くゝの必要を生じたがこれを戒定慧の三學に歸一せしめ得る。

戒

戒は戒律の意味であつて主として消極的に善を行はしめるものである。釋迦は初の正語正業正命を説いてその細則を規定しなかつた、然しその後、弟子等の品行その他の事情から種々の戒律を設け二百余箇條にも上つたそれが大体八種類ある。

一、不共住。 断頭無餘とも言ひ殺生、偷盜、邪淫、妄語の四戒でこれを犯したものは僧中に共住し得ないことになつてゐる。

二、僧 殘。 懺悔によつて僧衆中に共住することのできる輕罪で、色食住及び言語に関する十三戒。

三、不 定。 他人に不明を犯戒即ち隠れたところ、見聞せられぬところて犯した

罪で二戒。

四捨墮 法に反して積んだ衣や金を以て贖ふ罪で三十戒ある。

五墮 悔悔すれば消える軽罪で九十戒ある。

六説罪 白状すれば消える罪で四戒ある。

七衆學 常に注意して居ないと犯しやすい日常生活の細かい規定で七十五戒

(百戒とも云ふ)ある。

八減諍 論諍を除くために設けたもので七戒。

以上を總稱して二百五十戒といふのであるが何れも出家者たる比丘(男僧)

に對する戒律である、比丘尼に對する戒律は一層多い。これ等一切の戒律を持

するときは無量の徳を具足することができるので具足戒といつてゐる。

この外在家の者の為にする五戒と十善戒とがある。

五戒

不殺生

不偷盜

不邪淫

不妄語
不淫酒
十善戒

不殺生

不偷盜

不邪淫

不妄語

不兩舌

不惡口

不綺語

不貪慾

不瞋恚

不邪見

(身の三業)

(口の四業)

(意の三業)

定

定とは心を集中して三昧境に入り心身を澄徹して諸法を達觀する無漏の智慧

を生ぜしむる方法である、これは八段に分れて四禪、八定ともいふ。
第一、禪は心を一点にあつめて智的に探求し情的に喜樂捨へ安心の意の感ずること。

第二、禪は探求を離れて單に喜樂捨のみを感じる状態

第三、禪は喜を離れて樂捨のみを感じる状態

第四、禪は樂を離れて捨のみの境地

第五、空無辺定は煩雜な色相を離れて無辺の虚空を觀する境地

第六、識無辺處定は内界の無辺の識を觀する状態

第七、非所有處定は空識兩觀を脱し平等無差別の無想を觀する状態

第八、非相非々相處定は識無辺處空、無所有處定のいづれをも離れたる境地

この八定は精神が澄徹して一切の相對的心境を脱し宇宙の實相と渾一する階段を示したやふのものである。

慧

慧とは修業の結果澄徹した大觀智が発現して一切の法則の特殊性と普遍性を分別し四諦を證悟して涅槃に達する最高の心的作用である。

上記の戒定慧は總て出家者の正行（第一義的な出世間的の修行）である、眞に出家得脱せんとするもの是非とも實行すべきものである。

是の外、小懲、知足、忍辱、忠孝、友愛、勤勉、慈悲、布施等の徳の實行をも奨勵して居る。

更にこれ等の一切の戒律を一括して、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度にわけてもゐる、布施は貪慾心を去つて施をすることで積極的の善行である。

持戒は消極的に惡を止めること。

忍辱は辱に對して復讐の心を起さす多くの舌を忍ぶことである。而してこれも三學の中に包含される即ち布施と持戒は戒に忍辱と精進と禪定は定に智慧は慧にそれ／＼包括するを得る。

第四節 小乘佛敎の敎義

其 一 小乘經典の結集

小乘佛敎は釋迦の歿後四回の結集によりて成立したる佛敎經典によつて傳ふ

るものである、結集の第一回は釋迦入滅の直後王舎城外竹林精舎の石窟内に於て大迦葉等を主として行ふたものであり、第二回は歿後約一百年耶舎長老を主となし吠舍離城附近に於て行ふたものであり、第三結集は歿後約二百年アソカ王弟帝須^{アジシユ}が華氏城附近に於て行ふたものであり、第四結集は歿後六百年アッガン王、カニシカ王の命により世友尊者がカセミラ國の環林寺附近に於て十二年を費し行ふたものであつて従つて釋迦の教義と共に是等結集を行ふたもの、思想を含有するものであり、其後昆の小衆佛教は印度に於て二十余の諸宗派に分裂したるものである。

小乗佛教經典は左の如くである。

- 長阿含經
- 中阿含經
- 增一阿含經
- 雜阿含經
- 十誦律 (有部律)
- 四分律 (法藏部律)

- 五分律 (化地部律)
- 僧祇律 (大衆部律)
- 俱舍論
- 成實論

其二 緣起論

佛教に於て最も重きをなすものは緣起論と實相論と修道法とである。緣起論は時間觀念の下に現象界發生の次第を説くものであり實相論は空間觀念の下に世界存在の原理を究明するものであり修道法は上記の緣起論及び實相論を根柢として萬法を体得し大悟徹底して佛となり涅槃の境涯に達する迄の修業法である。小衆佛教に於ける緣起論は原始佛教の思想をその儘繼承し釋迦の十二因緣説を以て眞理となし現世の前に過去の生かあり亦未來の生かある昆を三世因果と稱し現在の自己の生は過去に於ける生の業の果でありて現在の業によりて未來の生の世界を創造展開する而してその時間的順序は無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死であつて無なる眞理に關き心か業をなして現在の世界

を展開——現世の世界に於ても亦た無明なる真理に闇き心か業をなして未來の世界を展開し生病老死の苦を受くるものである、即ち行爲の力即ち業力が次の世界を創造展開するこれが因果關係であつて疑ふべからざる真理となすものである是を業感縁起の説と稱へ原始佛教の所説を其儘襲踏するものである。

其三 實相論

小乘佛教の實相觀も亦原始佛教の實相觀と同一であつて苦集滅道の四諦は疑ふべからざる真理であつて人生の苦は因果關係によりて生ずるものであるから是の苦を免かるゝには大悟徹底し總ての煩悶を解脱して業を滅するを要するとなすものである是が真理であるとすものである。

然しながら小乘佛教に於ては一切の萬有は現象に於て生滅隱顯するも体は三世に通して恒有のものであつて人の感覺を超越した存在を肯定し現在に顯現する以前の未顯現の過去にも實体は存在し又未來の未顯現の世界にも存在して法体は恒有するとなす是を三世實有法体恒有説となすものである換言すれば現象界の事物は皆無常流轉の一時的假現であつて永久性のものではないが唯た法体の

みは恒有であり三世隱顯の間に通して恒存すると言ふのである、而して法体とは何なるや、曰く真理である、而して真理以外のものは隱顯變化の假想である而して自己も亦假現である即ち假相の空である即ち無我であらねばならぬ、然し自己は無我であつても法体は存在する是を我空法有説と言ひ、三世實有法体恒有説と同一意義であつて結局煩惱を断絶して無我の境涯に歸すれば真理は究明せらるゝと言ふのである。

斯の如くして小乘の説は漸次に大乘の説に接近するも然しなから小乘に於ては猶ほ業感縁起の世界に於て物心兩界の對立を肯定し物を心の外に存在して居ると観るのであつて世界は業力所感により心より生じた世界ではあるが成立したる世界は心と物とは相對であり物は心外の存在であるが故に心を物の世界の束縛から脱せしめ解脱して無我の境涯に達せしめなければならぬと言ふのであつて二元論に近きものである。

小乘佛教の修道法は頗る発達して原始佛教の八正道を根本となすが猶ほ多くの諸法を示して居る即ち左の如くである。

其四 修道法

釋迦は修業の根本は八正道にあることを説いたが小乘佛教に於ては更に四念處四正勤四如意足五根五力七覺支八正道合計七科三十七道品を擧げてゐる、然しその中で最も大切なものは八正道であつて他のものは皆その分説に過ぎぬといつてもよい位である。

四念處

四念處は四念住ともいひ三賢位（五停心觀位、別相念住位、總相念住位）の別相總相の二念處に於て修する觀法（法を觀すること）である念處とは心を一處にあつめてよく憶持するの意で四念處とは色蘊の身、受蘊の受、識蘊の心、想行蘊の法の四境に對して人々の起す淨樂我常の四顛倒の妄見を破する爲め身は不淨、受は苦、心は無常、法は無我と觀することを云ふ。

四正勤

四念處の内觀に對し内外の行爲を清淨ならしめるもの即ち未生の惡を生ぜしめず、既生の惡を滅ぼし未生の善を生ぜしめ已生の善を益々增長せしめるために

修行精進すること。

四如意足

これは六神通（神足通、天耳通、代心通、宿命通、天眼通、漏盡通）を得て身心自由自在になる行法である欲如意足（禪定によつて如意足を得やうとして四正勤を行ふこと）念如意足（この願望を憶念して一心に禪定を行すること）進如意足（定を間斷なく精進修行すること）慧如意足（智慧を以て諸法を觀すること）の四つがある。

五根五力

信、進、念、定慧の五善法である、信は三寶（佛法僧）の眞を信して預流果（三界の見惑を断してつくし初めて聖者の流類に入りし位）を得ること進は惡をやめ善を身して四正勤を修すること、念は正念を以て四念處を行すること、定は禪定をなすこと慧を四諦の理を證悟することである。

七覺支

七覺支とは修道の時、その眞偽善惡を覺る（覺支）七つの行き方の意味である、法の眞偽を選んで眞をとり偽を棄つる擇法覺支、正法を選びこれに精進す

る精進覺支、眞の法喜に住する喜覺支、虛偽過惠を除断し眞の善根を増長する除覺支、外境にかゝはるこゝろを捨て、平安に歸る捨覺支、禪定に入り妄想を起さぬ定覺支、道法を修する時よく思念して定慧を正確平均ならしむる念覺支以上の七つで、いづれも心を平等にして法に精進する法である。

上記の諸説を戒靜信進念定慧の七修業法に綜合し得。

- 一、戒 正語正業正命 四正勤
 - 二、靜 (平安ニ歸スル) 喜覺支、輕安覺支、捨覺支
 - 三、信 (三寶ヲ合スル) 信力、信根
 - 四、進 正精進 四正勤、進如意足、進力、進根、進覺支
 - 五、念 正念 四念處、念如意足、念力、念根、念覺支
 - 六、定 正定 四如意足、定根、定力、定覺支
 - 七、慧 正見正思惟 四念處、慧如意足、慧根、慧力、擇法覺支
- 而して上記の戒靜信進念定慧の修業法を更に戒定慧の三種に綜合し得る。



第五節 大乘教の教義

其一 大乘經典の成立

上記の如く一方に於て小乘佛教が發展すると共に他方に於て大乘佛教が發展した大乘佛教は佛滅直後竹林精舎の石窟内に於て行はれたる第一回結集の選に漏れたる他の佛弟子等か阿羅漢導師迦を主として佛説を結集したものであると稱するか恐らくは眞實でなく佛滅後大に發展したる印度哲學の理論を加味し主として龍樹等か佛教の教理を大に發展せしめその後無著世親等更に是を發展せしめ最後は馬鳴等か更に發展して是を大成したものであつてその教義は著しく哲學的となつて居つて是等大乘佛教の經典たる般若經華嚴經法華經涅槃經等は恐らくは後世の作であらふと言はれて居る、今日現存する大乘佛教經典は左の如くである。

- 經
- 大般若經
 - 般若經
 - 仁王般若經
 - 法華經
 - 涅槃經
 - 華嚴經
 - 勝鬘經
 - 楞伽經
 - 維摩經
 - 解深密經
 - 無量壽經
 - 觀無量樹經
 - 阿彌陀經
 - 大日經
 - 金剛頂經

律一梵網經

- 論
- 大智度論
 - 中論
 - 十二門論
 - 百論
 - 十地論
 - 攝大乘論
 - 唯識論
 - 洋土論

上記の如く大乘佛教は龍樹世親馬鳴等が當時の印度哲學により大に發展せしめたるものであるがその主眼とする所は實相論であり緣起論であり修道法であつて小乘佛教に於ては緣起論を根本として實相論は是に附隨したるものであるが大乘佛教に於ては實相論を主眼とし是を第一義諦と稱し緣起論を附隨として是を世俗諦又は第二義諦と稱して居るを著しく異なるものである。修道法に至つては多少の相異なるも大體に於て小乘佛教と異らぬが自己修養を主眼とするが

故に戒律の如きに重きを置かざるを異れりとするものである。是、他大衆佛教には佛身論、涅槃論、悟界論等あるも甚だ重要なるものでないから見を省略する。左に龍樹世親馬鳴等の所論を序を追ひて掲ぐるであらふ。

其二 龍樹の實相論

龍樹は馬鳴と同じく世俗論と第一義諦の二諦を立てこれを以て諸法觀察の二大範疇として居る第一義諦は本体觀であり世俗論は現象觀である。

この二大範疇から彼は小乘の五蘊十二處十八界等の區別や、三界、六趣二十五有といふやうな迷界の種類、その外苦集滅道の四諦などは總て世俗論による相対的差別の見に過ぎず第一義諦から見れば假法に過ぎないと斷じてゐる。即ち世間出世間、有爲無爲等の法は本質的には空である我も無我も、世間も出世間も、有も無も、有爲も無爲も煩惱も菩提も、すべて相対的のものは空である、相対法はすべて空である、否空であるとする事とも亦空であると斷定して居る。然らば諸法の實相は何であるかと言ふに彼は諸法の實相は平等一相であつて相対なく無相不可得で空である。即ち相対的差別的のものを超えてゐる故に世俗

論を以てしては知ること不可能である。世諦のための故に衆生ありと説き第一義諦のために衆生を『無所有』と説く。(智度論) 諸の實相は性や相對を超越した空の空なるものである。即ち一切空であると云つて居る。

では諸法は何故に斯く空であるかと言ふにそれは自性へ一切の現象世界を開発する本質的物体この自性には善憂闇の三性質があり、これに精神的本体たる神我が作用を及ぼして一切の差別的現象を生ずるといふ(なき)因縁によつて生じてゐる故であると説く。因縁は因縁を生む諸法は因縁によつて滅する因縁は自性なきものであるからこの因縁に由來する諸法も生滅して窮りない。若し諸法に自性があれば因縁に支配されないので不朽に存在する筈である。衆縁具足相和シテ物生スコノ物象因縁ニ属スルガ故ニ自性ナシ、自性ナキガ故ニ空シ、若シ法ニ性相アラバ即チ衆縁ヲ待タズシテ有ナリ、若シ衆縁ヲ待タザレバ即チ法ナシコノ故ニ空ナラサル法アルコトナシ。(中觀論)

龍樹は諸法の實相は平等一相であつて相対なく無相不可得にして空の空なるものであると言つた。然しこの空は有に對する空ではなくして有無を超越した空、即ち實相の意味である空とは假りに名けたに過ぎない。『タ、衆生ヲ引導センガ

爲メノ故ニ假名ヲ以テ説ク有無ノ二邊ヲ離ル、乃故ニ名ツケテ中道トナスコノ法無性ノ故ニ有トイフヲ得ズ、マタ空ナキカ故ニ無トイフヲ得ズ、（中觀論）即ち有にあらす空にあらす無にあらざる境地である。中道に諸法の實相があるといふのである。

そして彼はこの境地が一切の認識と觀念とを起えた絶対的境地であることを説明する爲めに八不中道論を立て、いる。八不とは生滅常斷、一異來去の八觀念この觀念は諸法を實體ありと誤解する最大の迷妄であるを否定した意味で「不生、不滅、不常、不斷、不一、不異、不來、不去」のことである。生滅常斷は時間的觀念であり一異來去は空間的觀念、生滅來去は動的觀念で常斷一異は靜的觀念である。これ等は認識の根本であるがこの何れか一方を肯定するにしても否定するにしても、そこに生ずる認識は相對的のものとなつて總體的のものとはならぬ故にこれ等の何れも否定して尚これ等の上に超越した大存在の認識を發露せしめやふとしたのである。八不中道論とはこれ等の八觀念を否定した中道にこそ眞の實相のあることを論じたものであるからかく名づけたに外ならぬ。

諸法が因縁によつて生じ因縁によつて滅するといふも假相に囚はれた謬見に

過ぎない、萬物の生は死によつて斷滅するといふも常住であるといふも同じく假相に囚はれた謬見である。又諸法は一であるといふも諸法はそれ／＼異なるといふもいづれも假想を脱しないもので又諸法は一道から來つて一道に去るといふやうな考へ方もやはり假相に囚はれたるものに外ならぬ、生ぜず滅せず常ならず斷せず一ならず異ならず來らず去らずこの境地は空であるが、それも有無を超えた空であるから中道である、そしてこの中道にこそ眞の諸法の實相がある。

其三 世親の實相論

世親の實相論は世界を吾人の心の創造であるとする一種の唯心論であつて、世親の根本思想である前に無著の賴耶緣起論を世親の繼承して大成したと言つたが、それはこの唯識論のことである。

先づ吾々は眼耳鼻舌身意の六識と末那識及び阿賴耶識の八種の識がある、とここでこの眼耳鼻舌身意の六識は外界の諸現象を認識してそれを第八識即ち阿賴耶識に印象する、そして第七識の末那識は内部の第八識を實我と誤認し

我執を起すといふも、いづれも第八識たる阿頼耶識の自識の分別（阿頼耶識の自体分が主観と客観とにわかれて主観的一面が客観的一面を認識するに過ぎないので自識の分別と云ふ）に外ならない。従つて我々の眼に映する多くの現象世界の諸法はいづれも第八識の投影であるといふことになる。即ち阿頼耶識即ち諸萬法といふべきで、こゝに萬法唯識論的唯心論が成立するのである。

無着及び世親は第八識たる阿頼耶識に對して能藏、所藏、執藏の三義を含ませ、更に無没識又は藏識などとも名づけてゐる。それは阿頼耶識か他の七種の識の印象する種子をよく藏し且つ第七種の末那識の實我の執着を起す対象となると共に、それ等の七種の印象を把持して没しない故である。

末那識は第六識たる意識と殆んど同じで唯意識の外面向つて認識するのを意識と呼び意識の内的に向つて認識するのを末那識と呼んだのである。然し、いづれにしても阿頼耶識以外の七識は第八識の阿頼耶識の反映分化で根本識たる阿頼耶識あつて、はじめて存在するに過ぎないものである。

其四 馬鳴の實相論

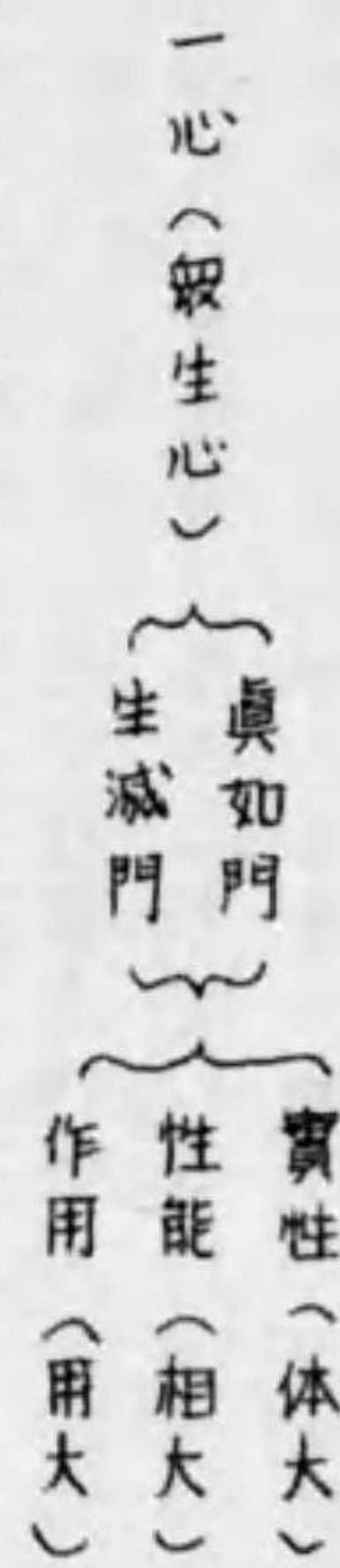
馬鳴の萬法一心論は大乗起信論の根本であつて全宇宙を一心に歸する絶対的唯心論である。無着世親は八種の識を立て、是に宇宙を根する唯心論であるが起信論に於ては更に展開して唯一心を立て宇宙即一心として居る。

ところでその唯一心の内容であるが、それは物に對する相對的の心ではなく物にもあらず心にもあらずして、しかも物心を包容し一切の法を含んだ絶対心である。これを彼世では薩有緣棟心といつて居るが起信論の著者は假りに是を名づけて衆生心と云つて居る。「所言ノ法トハ曰ク衆生心ナリコノ心スナハチ一切世界ノ法ト出世間ノ法トヲ攝スコノ心ニヨツテ摩訶衍ノ義ヲ顯示ス」(起信論) 摩訶衍とは大衆のことであつて小乗の對、大人の道、大苦を滅し衆生を濟度する道の意味である、即ちこの衆生心は一切の萬法を攝して大衆の深義をあらはすものであると言ふのである。

この一心を二門に分ける即ち心眞如門と心生滅門である。「一心ノ法ニヨツテ二種ノ門アリ一心ニハ心眞如門ニハ心生滅門ナリ」然して眞如門とは本体論的見方から立てたもので生滅門は現象論的の見方から立てたものである。即ち一心即萬法、これを本体論的に見れば生ぜず滅せず増せず減せずる不朽の眞如で

あり現象論的に見れば生滅起伏して極りない、「生滅」界である然してこの二者は不離のものであつて一体の二面に過ぎぬ。

更にこの一心を性用の上から實性、性能、作用の三性ありとする、實性とは不生不滅不増不減の眞如の實性、作用とは世間出世間、有漏無漏の一切の善法を生ずる作用、性能とは無限の徳を包含する性能の意で實性は一心即ち衆生心の体大、性能はその相大、作用はその用大であるから三大と名づける（大とは絶対無限の義である）これを因にすること次の如くである。



大乘起信論は假りに分つて離言眞如と依言眞如の二つを立て、居る勿論二つは同一のものであるが離言眞如は龍樹の第一義空と同じく不可言、不可説の絶對境のことで依言眞如は假に言を以てこの絶對境を説明したもので、ことである所てこの依言眞如は、如実空と如実不空との二面から説明される如実空とは眞如の一切の相對差別を脱した無相不可得なるところに名づけたもので如実不空

とは眞如が一切の相對の上に絶した空の空なるものでありながら、然かも一切の諸法を具へて居る所に名づけたものである。如実とは眞如と同意味である即ち如実空は眞如の消極的説明であり如実不空は眞如の積極的説明に外ならない。

其五 龍樹の縁起論

縁起論では龍樹は万有の縁起（万物の因縁を生じて生滅する諸現象の因縁）について如何なる解釋を下して居るか龍樹はこの点に就てはあまり詳かに述べて居ない、この意味で龍樹は実相論者とされて居る。然し彼も亦便宜上世俗諦に立つて業感縁起論を執り以て諸法の縁起を説明して居る。

凡夫人、聖法ニ入ラスシテ諸法ノ性相ナキヲ知ラズ顛倒愚癡ノ故ニ種々ノ業因縁ヲ起シコノ諸ノ衆生業ニシタカツテ身ヲ得——コレ無性法ナレハ業ナク果報ナシ（智度論）

即ち顛倒愚癡の故に多くの業因縁を起しこの業因縁によつて未來の生滅を受けるといふのである従つてよく第一義諦に徹し諸の法の空にして中道なることを体得すれば一切の業を脱してよく解脫境に達し得るのである「眼ニ生滅ヲ見

ルハ即チコレ愚癡顛倒ノ故ナリ諸法ノ性空無ナルヲ見ハ決定シテ幻ノ如ク夢ノ如クナラン但タ凡夫ハ先世顛倒ノ因縁ニヨツテ此ノ眼ヲ得テ今世憶想分別スル因縁ノ故ニ生滅ヲ見ルトイフ第一義中實ニ生滅ナシ(中觀論)

三八

其六 世親の縁起論

前に極く大づかみに萬法萬象が皆吾々の阿頼耶識(第八識)の縁起したものであるといふ唯識論を述べたがその阿頼耶識から萬法の展開縁起してゆく意識を次のやうに説いてゐる。即ち阿頼耶識は二種の種子を蔵して居る、それは名言種子と業種子である名言種子とは萬有の展開起伏する質料であり業種子は萬有の展開起伏する動力である、ところでこの二種子がどうして萬有を展開してゆくかといふに眼、耳、鼻、舌、身、意等の七識が阿頼耶識に印象した所のものを阿頼耶識は能く包蔵して以て未來に萬有を展開する質料とする。これが名言種子である。これに対して第六の意識は特に善惡の業をつくつて阿頼耶識に印象する、これが業種子である。然して名言種子は萬有の質料であつて、これに業種子が働くと名言種子はそれに剝奪されてその業に相當した萬有を展開す

ると言ふのである、然してこの種子縁起は過去、現在、未來の三界に亘つて同である。

これは一種の循環理論である。即ち阿頼耶識の種子は萬有の現象を生み萬有の現象は二種の種子を阿頼耶識に生じて更に萬有を生ぜしむる。

これは迷界の宇宙の現象に對する縁起論であるが悟界の宇宙も亦阿頼耶識に内在する無漏の種子(無漏とは煩惱なきの意漏とは迷又は煩惱の意である)によつてと云ふことになつてゐるこの無漏の種子は多くの佛や菩薩の説法によつて次第に培はれてゆくもので、これが發展するにつれて次第に有漏の八識(有漏とは無漏の反対)を無漏の智慧に轉化させてゆくのである。そして無漏の種子が有漏の八識を悉く無漏の智慧に轉化させた時、そこに悟道はひらかれて佛果が得らるゝのであるとする。

其七 馬鳴の縁起論

起信論ではこの絶對の眞如から相對の生滅界が生ずるとなし其理を妄念に帰してゐる「謂ユル心性ハ生滅セズ一切ノ諸法ハ唯妄念ニヨツテ差別アリ若シ心

念ヲ離レバ即チ一切境界ノ相ナシ」といひ又、如來藏ニヨルガ故ニ生滅ノ心アリ」といつてゐる。如來藏とは眞如のことである、如來は佛の異名、眞如はよく如來の功德を含攝し出生し、又衆生の煩惱のために隱覆さるゝが故に如來藏といふ義に含攝、出生、隱覆の三義があるのである。即ち眞如より生滅の現象が緣起すること、然してそれは妄念によるのであるといふことにある。

眞如に妄念が印象する時そこに生滅の現象界が生じる。然して眞如に妄念の印象した境地を阿梨耶識（阿賴耶識）と全く同じ」となす、この阿梨耶識は不生滅の眞如から生滅界の緣起する本源で謂はゞ眞如も妄念、眞如も生滅の中間に立つて居る、即ち「不生不滅と生滅と和合して一にあらす異にあらす、名つけて阿梨耶識となす」更に曰く「この識に二種の義あり能く一切の法を攝し一切の法を生ず云何んか二となす一には覺の義二には不覺の義」と、即ち眞如と生滅の中間にある阿梨耶識は一步を悟れば眞如に還ることができろが、一步を誤れば生滅の無明に墮する。然してその契点は眞如を「覺スル」と「覺セサル」との一点にあるから阿梨耶識に覺と不覺の二義を含ましめるのである、然して覺は眞如であつて不覺は無明である。

この無明（不覺）が平等一相一味の眞如を差別的に見てそこに主客の面觀を生ずる。そしてこの主客觀が更に展開していろいろの業をつくり更に様々の苦報をつくる、そこに迷界宇宙の展開があるその展開を九相に分ちこれを三細と六麁とに大別して居る。



三細とは三つの細識の意味で心がまだ客觀界を識別するに至らない三つの境地の意、六麁（麁は顯着の意）とは既に客觀界を顯着に分別した境地のことである。

ある。

無明業相は頼耶縁起論の自体分にあたり不覺無明のために眞如清淨識の起動した最初の業相（業はハタラクの意）で主観客観未分の状態である。（業相）

主観 能見相は漸く無明相より轉して主観の生じた境地（轉相）

客観 境界相は客観の生じた境地（現相）

認識 智相に至つて主観が客観を對等と認めこれを批判知覺する

連続 相續相は智相の更に展開して主観が客観によつて苦樂を感じ相續して絶へない

状態のこと

執着 執取相は相續相より更に展開して執着を起した境地

分別 計名字相は更に是非善惡美醜等の概念を分別する境地

煩悩を起す 起業相は計名家相のために種々の業をつくる境地

苦受 業繋苦相は更に起業相によつて起した業のために種々の苦果を生ずる境地である。

る。

更に又この内の無明業相、能見相、境界相、智相、相續相を心識の变化として見た見地から業識、轉識、現識、智識、相續識の五意ともして論じて居る勿論

五意は心識の方面から見たのであつて業識は無明業相に轉識は能見相に以下それ／＼相應するものである。

又この九相を生住異滅の四相も分つて居る、生相とは無明業相のことで最初の相のこと、住相とは能見相境界相、智相、相續相のこと、異相とは執取相と計名字相のこと滅相とは起業相繋苦相のことである。

其八 龍樹の修道論

世俗諦から第一義諦に參するには如何にしてよいかこの修業方法について彼は十波羅密と四無量心とを擧げてゐる十波羅密とは又十度ともいひ、一、般若（智慧）二、檀那（布施）三、尸羅（持戒）四、羼提（忍辱）五、毘梨耶（精進）六、禪那（靜慮）七、方便（いろ／＼の手段を以て衆生を濟ふ行）八、願（上菩提を求の下衆生を化する二つの願を行ふこと）九、力（福生力、神通力、信力、精進力、念力、三摩地力）十、摩訶（大）等持とも言ひ定七名の一である、定を修すれば心を一ヶ處に住させて動かぬ故に等持といふ三摩地力とは斯る定の三昧に住する力のこと）般若の七力を得ること、十智（即ち一切智を得ること）以上の行でとりわけ

般若即ち慧を得ることを最も重視して居る十波羅密の波羅密とは彼岸に至るの意味で生死の此岸をわたって涅槃の彼岸に到るの意味で菩薩の修める行のことである。

四無量心と言ふのは一、慈即ち衆生に樂を與へやうとする心、二、悲即ち衆生の苦を救ふとする心、三、喜即ち佛の功德の廣大無窮なるに歡喜する心、四、捨即ち一切のものに對して全く平等なる心、この四の心は菩薩へ即ち大願を以て佛道に入り四弘誓願を發して六度の行を修し上菩提を求め下衆生を化する大覺の士大衆教の至上道に達した人のこと（主として衆生を利する）の廣大であることを示して居るからこれを四無量心といふのである。

是の十波羅密と四無量心とを兼行兼備することは菩薩の正行であるが非常に困難なことであるから別に易行道を説いて居る。十住論で難行道と易行道の二つの修業法を論じ難行道は前の十波羅密や四無量心を實行することで易行道とは阿彌陀彌勒釋迦等の佛を念しその名號を唱へ念佛の功德によつて無上正覺を得る道であるといつてゐる即ち自力と他力の二つの修業法が明示されたのであつてこの易行道は古代の佛陀に対する信仰や三寶皈依（三寶とは佛寶、法寶、

僧寶のこと）の思想を根據として居るのである。

其九 世親の修道論

唯識佛敎の最高の目標は無漏の四智を體現して四涅槃に住し三身を具へる点にあるから修業論もこの目標に達する路を説いてゐることは勿論である、然してその正行としての三學六度及び往生を擧げてゐる。

三學とは無著の「攝大乘論」に擧げてある、一、阿頼耶識、二、三性、三、遍法唯識、四、六度、五、菩薩の十地、六、大乘戒學、七、大乘心學（定學）、八、大乘慧學、九、無住處涅槃、十、佛三身の「十勝相」の中の大衆戒學大乘心學大乘慧學のことである、然しこれは畢竟するに萬法唯識の理を体得する階段に過ぎぬ、その觀法を五段に分けて五重唯識觀としてゐる。

五重唯識觀とは一、遣虛存實識、二、捨滯留純識、三、攝末歸本識、四、隱劣顯勝識、五、遣相證性識の五種のことである、遣虛存實識とは遍計所執性即ち唯識の理を知らないで、心外に別法があるやうに誤認する迷妄を去つて依他起性と圓成實性とを殊す觀法の第一階段である。捨滯留純識とは遍計所執性と依他起性の客

觀的相分を去つて主觀的見分を留むる觀法の第二階段、捨末歸本識とは前の捨滯留純識で尚ほ去り得なかつた主觀的見分を心識自らの反映として自體分の本に帰する觀法の第三階段、隱劣顯勝識とは根末歸本識で去り得なかつた自體分の外面を去り顯法唯心を知る觀法の第四階段、遣相證性識は隱劣顯勝識で去り得なかつた依他起性の發部をすべて除去して唯識の本質たる圓成實性を悟ること、こゝに於て涅槃に住し三身の佛果を體現するに至るのである。

然しこれ等は正行であつて非常に難行であるが故に別に往生道を説いておる往生とは死後極樂淨土、乃至兜率天へ往き生れることである、即ち淨土往生兜率往生の二種である淨土往生の思想はその著「無量壽經、優婆塞舍經生偈」に於て説いたもので後生に多くの影響を興へて居る。

其十 馬鳴の修道論

大乘起信論の最高理想は一切の妄念を斷じて究竟覺に入つて眞如を現し以て涅槃に住するに在るのである。然してその方法として四信五行の説を立て、ぬ

四信とは

一、眞如を信すること即ち眞如の諸法の根本であることを信すること

二、佛を信すること即ち眞如の現はれとして功德無量なる報身佛を信すること

それは同時に内心の佛心を現はす機縁である。

三、法（五行の法）を信することこゝにいふ法は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度の行法のことである。

四、僧を信すること 僧とは佛法を傳へ説くもの、ことこの僧を信することは即ち菩薩に親しみその徳化を受けけることとなる。

五行とは施門、戒門、忍門、進門、上觀門のことである。

一、施門とは他を益すること、財施、無畏施、法施の三種ある財施は財を他に施すこと、無畏施は他人を救ふて慈悲の心を培ふこと、法施は自他を圓滿ならしむること。

二、戒門とは五戒十善戒（小乘の教義參照）等その他佛の戒律を守ることである。

三、忍門とは忍辱のことで一切の危害を忍ぶことである。

四、進門とは常に精進して怠らないことである。

五、止觀門とは必ず凝集し澄徹させて以て眞如生滅の實相に徹すること、修業の最高位である。止は心の平靜であつて外物に動かされない境地觀を明かに因縁生滅の相を視ること即ち止も觀も二者互に相助けて眞如を現し生滅なく差別なく萬法一心實相一味一相の境地に住し得るのである。「若し人唯止ヲ修スレバ則ち心沈没シテ或ハ懈怠ヲ起シ衆善ヲ樂マズ大悲ヲ遠離セン是ノ故ニ觀ヲ修ス」是ノ義ヲ以テノ故ニ是ノ止觀門共ニ相助成シテ相捨離セス若シ止觀具ハラスンバ則ちヨク菩提ノ道ニ入ルコトナシ」(大業起信論)

四信五行は正行である、之に對して起信論は念佛を説き以て易行の道をひらいてゐる。若し人專ラ西方極樂世界ノ阿彌陀佛ヲ念シテ修スルトコロノ善根廻向シテ彼ノ世界ニ生セント願求スレバ則ち往生ヲ得テ常ニ佛ヲ見ルガ故ニ終ニ退スルコトアルナシ、若シ彼ノ佛ノ眞如法身ヲ觀シテ常ニツトメテ修習スレハ畢竟シテ生スルコトヲ得テ正定(定ハ靜慮ニ味ニ入ルコト正定ハ正シキ定)に住スルカ故ニ「即ち惠心阿彌陀佛を念して佛土に住生せんことを願へば一切の惡業を離れて極樂に往生することができるといふのであるこれは四信五行の自力聖道の道して他カ易行の門である」

第六節 支那佛教

支那に於ては後漢の明帝の永平十年(皇紀七二七年)に蔡愔等が西域から佛經及び迦葉摩騰竺法蘭を得て長安に來りしに始まるその翌年桓馬寺を建立し爾來西域より多くの僧來りて佛教經典の翻譯に従事したその初めは微々たるものであつた。

而して支那佛教の大成せられしは殆んど隋唐以後である、その以前には小乘阿毗曇宗(或は一切有部宗又は單に有部)が符姚二秦の間にありしのみである、成實宗は梁の時代に最も盛んで其主要なる學者としては梁の三大法師と言はれし智藏(開善寺)僧旻(正嚴寺)法雲(光宅寺)がある、猶ほ涅槃經の譯後其の研究が盛んであつたので之を涅槃宗と名づけ「十地論」上十地論宗「撰大乘論」より撰論宗ありとも言はれて居る、隋唐以後では嘉祥の三論宗、智顛の天台宗、玄奘の法相宗、法藏の華嚴宗、惠能(禪)唐より六世)の禪宗、善導の淨土宗、道宣の律宗、善無畏、金剛智等の開めた密教等があるこれを列記すれ

は丘の如くである。

俱舍宗	俱舍論
成實宗	成實論
地論宗	十地論
攝論宗	攝大乘論
涅槃宗	涅槃經
天台宗	法華經
三論宗	中、十二門、百の三論
法相宗	解深密經、唯識論
華嚴宗	華嚴經
律宗	四分律
禪宗	楞伽經、維摩經
念佛宗	無量壽、觀無量壽、阿彌陀
秘密宗	大日經、金剛頂經

第七節 日本佛教

其一 發達の概要

我國に於ては既記の如く欽明天皇の御代に始めて佛教が傳へられたが、其後飛鳥、奈良朝時代に成實宗、三論宗、法相宗、俱舍宗、華嚴宗、律宗の六宗が傳へられた。法相宗と俱舍宗は行基菩薩の師の道昭といふ人が唐から來て元興寺に住して之を傳へたのである。

三論宗は高麗の僧慧灌が三論を講じたのに始まり成實宗は三論宗の附屬宗で三論宗と共に傳はつた。華嚴宗は新羅の僧審祥が天平十二年良辨に招かれて來つて華嚴經を講じたのに始まる。律宗は天武帝の時唐から歸朝した道光によつて傳はり

平安朝時代に於て桓武天皇は藤原伊勢人を造寺長官とし東西の二寺を建立して左右兩京の鎮護道場とし給ふた。然して帝の末年には最澄、空海の如き高僧があらはれ最澄は天台宗を叡山に起し空海は真言宗を興し真言秘密の法を弘めた。

この時代になつて天台眞言の二宗のために在來の法相、三論、俱舍、成實の四宗は勢力を失ひ華嚴、宗律宗が相當に勢力を持つて居た、然して東寺の眞言宗と叡山の天台宗とは當時の二大宗教として勢力を振ひ皇室の信仰を受けた。

この時代には民間に於ける佛教は著しく衰へ僅かに陰陽道のみが行はれ人民は現世祈禱の迷信に囚はれてのみ居た、然し空也か現はれて踊り念佛を唱へ以て後世の法然の念佛浄土宗に先驅したことは注目し値する。

鎌倉時代に入つて政治方面の改革の氣運に促がされて革命的氣分が漲つて來た當時華嚴は南都に天台は叡山に眞言は東寺及高野山にとれ／＼勢を繼へて居たが徒らに権力の争奪に専念し時に高僧達識の士も出でたが、その教風甚だ貴族的で一般民衆とは没交渉であつた、この時「我は烏帽子をも着ざる男なり十惡の法然、愚痴の源空なり」と稱して常住安樂の浄土に赴くは唯彌陀の本願を頼むにありと他力本願の念佛宗を開いたのか浄土宗の開祖源空、法然である。

この他力易行の浄土宗の主張は當時の貴族的宗教に對する平民的宗教の一大挑戰であつた、それだけ多くの迫害を受けたが又眞の平民的宗教を要求するものには大に歡迎せられ、人材の來り投するもの甚だ多く中でもその門から出た

親鸞は眞宗を開いて信心往生の義を立て浄土宗の精神を益々發揚せしめた。

法然の浄土宗の勃興した頃禪宗の教義も一新紀元を開いた、禪宗は孝徳天皇の代に道昭が法相宗と共に支那から傳へて來たものであるが一宗として發達して居なかつた、傳教が唐僧道璿から北京禪を授かり入唐して更に嶽然から南宗禪を授かつて以來、叡山に於ては總へて禪書の研究、禪の修行なども行はれたが然しやはり一宗として發達してはゐなかつた。後摂津三寶寺の能忍か盛んに禪を唱道し發悟したところを記録し文治五年弟子を宋に遣はし育王山の佛照より照明をうけ日本達磨宗と稱して弘めたがその後絶へて傳はらなかつた、今日傳はつて居る禪宗は法然と同時に榮西の開立したものである。榮西は仁安三年入宋し天台山の虚巻に就て臨済宗の秘奥を受け建久二年帰朝し京都建仁寺に臨済宗を開いた。

榮西の門より出でたる道元は貞應二年明全に従つて宋に入り天童山に於て如浄から曹洞禪を継承し帰朝後深草に庵を結んで曹洞宗を開いた。

浄土宗開立に後るゝこと八十年にして日蓮が日蓮宗を開いた。日蓮は「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」と叫び當時の諸宗を破折し法華一乘の旗を

かざして一天四海皆歸妙法と獅子吼した、その門下には日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持等を初めとして多くの高僧輩出しその教義の傳道につとめた。日蓮が開宗して後二十三年にして一過が時宗を開いた。以上の如くである、今日最も行はるゝは天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、禪宗、法華宗等である。

其二 天台宗

天台宗は天台、密教、戒律、禪の四宗を打つて一丸としたもので、法華經、仁王經、金光明經、大智度論を以て天台の三經一論とし、大日經、金剛頂經、蘇悉地經、菩提心論を三經一論とし禪は楞伽經四卷を所依の經としてゐる。この宗では教相と止觀との二門をたて、ゆる教相門と云ふのは釋迦一代の法を五時八教を以て判釋したもので五時とは
一、華嚴時、成道の後三七日間菩提樹下の說法時
二、阿含時、十二年鹿野園に小乘の四阿含を説かれた時
三、方等時、鹿野園以後八年間維摩以下の經を説かれた時

- 四、般若時 二十二年間大般若經以下を説かれた時
 - 五、法華時 入滅迄八年法華經を説かれた時
- である、然して八教とは
- 一、頓 教 華嚴經にて頓悟頓證の教を云ふ
 - 二、漸 教 方等經般若經で漸悟漸證の教
 - 三、秘密教 相互の得益、相知れざる教
 - 四、不定教 漸頓不定であるが相互の得益の知れてゐる教
- 又四つの説法の方法に
- 一、藏 教 小乘教
 - 二、通 教 権大乘教
 - 三、別 教 菩薩の法を明にする教
 - 四、圓 教 圓融無礙の最上級
- の四つの内容のことを云ふ然して法華經を以て釈迦の最上級とし、その圓融無礙の奥髓を三諦圓融と一念三千の教理を以て説明して居る、三諦とは
- 一、空諦 現象界を平等と観すること、

二、假諦 他面より差別なりと観すること

三、中諦 差別即平等、平等即差別の觀を云ふ

而してこの平等にして差別、差別にして平等、しかも差別を離れて平等なく、平等を離れて差別なく差別即平等の中道を三諦圓融の理といふのである。

一念三千の理とは我々の一瞬の一念に三千の理を含んでゐると云ふことで三千の義理とは地獄餓鬼畜、修羅人間天上、聲聞、緣覺菩薩佛の十界に十如是ありとし合計千如是とし更にこの千如是は國土、世間、衆生世間五蘊世間の三世間にわたる故に三千の義となるのである、而してその十如是とは一、如是相、二、如是性、三、如是體、四、如是力、五、如是作、六、如是因、七、如是緣、八、如是果、九、如是報、十如是本末究竟の十如是のことである。

其三 眞言宗

眞言宗は日経、蘇悉地経、金剛頂経等を所依の經典とし龍樹、龍智、金剛智、不空、慧果と相承けて來たもので空海は宋の青龍寺の慧果和尚から承けて我國に弘めたものである。

眞言宗は縱横の二面から釋迦の教を批判してゐる然して縱より見て十住心に分つてゐる十住心とは

- 一、異性瓶羊心、凡夫の罪惡に溺るゝこと
- 二、嬰童持齋心、出世因果の理を知らぬ愚童が持齋斷食して善根を積む心
- 三、嬰童無畏心、十戒を保つて向上する心
- 四、唯識無我心、色、覺、想、行、識の五蘊の法は有であるが五蘊が假りに和合して生じた物質には我なしといふ心で聲聞の小乘心である。
- 五、拔業因種心、三世の業の因種をぬくための十二因縁を修する小乘緣覺の心
- 六、他緣大乘心、他を利用する大乘心
- 七、覺心不生心、三論の住心であつて心の本性不生を自覺する心
- 八、一道無畏心、天台の住心で一乘の法によつて無為の正道に達する心
- 九、極無自性心、摩訶の住心で自性を無に歸せしむる心
- 十、秘密莊嚴心、大日如來の秘奧三密の教により一切衆生本具の功德を莊嚴する心

尚ほこの宗は放義として宇宙の本性を地水火風空の六大とし相として大受茶羅

三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯摩曼荼羅、の四種に分け、用として身口意の三密を説いて居る。

尚又成佛に理具成佛（凡夫も無始の昔から佛性を持ち理窟上大日如來と同一のものであると言ふこと）加持成佛（三密相應の加持によつて佛性を體現すると言ふ）顯徳成佛（身心ともに大日如來と同地位に到達したものの）の三種がある。

其四 淨土宗

淨土宗は印度では馬鳴、龍樹、世親等が説き、支那では善導が大成したものである、法然は善導の思想を承けてこれを我國に創唱したものである。

淨土宗は淨土の三部經、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經を正依の經典とし阿彌陀佛の本願を信じてこれに帰依するので彌陀の四十八願中の第十八の「若し我佛たるを得んに十方の衆生、至心に信樂し我國（淨土）に生れんと欲して乃至十念（一聲二聲乃至十聲の少數の念佛にても）の意するものあらんに若し生れしむる能はずんば正覺を取るまし、た、五逆と正法を誹謗するものは除く」といふ願を眼目なりとしこの願にすかつて彌陀の名を唱ふれば何人も往生するとしてゐる。

然してこの宗の教義としては起行、安心、作業の三がある、起行とは常に南無阿彌陀佛を唱ふること、安心とは三あり、觀無量壽經に「若し衆生あつて彼國に生ぜんと願せば三種の心を發すべし、即ち往生す何をか三となす一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり、この三心を具する者は必ず彼國に生ず」とある至誠心、深心、廻向發願心である、至誠心は善導が自利眞實心利他眞實心の二つに區分して居るが兎に角眞善の根源である、深心は深く彌陀の救済と淨土の理想郷を信仰する心、廻向發願心は初の往生心に出発して更に人類救済の實を完了せんとする願心である。

作業とは一、讀誦正行、二、觀察正行、三、禮拜正行、四、稱名正行、五、讚歎供養正行の五行のことでこの内第四の正名正行が正定業で他の四種の行は助業である、以上の安心、起行、作業の三を具足すれば必ず百人が百人往生できるといつて居る。

其五 浄土眞宗

浄土眞宗は釋迦一代の法を聖浄二門に分け、更に浄土門を眞宗假宗に分け、法然門下の四流六派の浄土各派や時宗等を假宗とし、眞宗の報土往生をなすと説いて居る。この特色として見るべきは純粋に他力を標榜すること、罪人を重視して居ることである、即ち我々は極悪人故に彌陀の本願の力によりて往生し得るとして全然自力を認めず、又「善人尚もて往生を遂ぐ、いかに況んや悪人をや」といつて善人でさへ往生するのに悪人が往生しない譯がないと悪人の悪人ならざるを力説して居る他の点では殆んど浄土宗と同じである、もと浄土眞宗とは法然の浄土宗の眞の意味を顯現する意であつて他の浄土宗に對立して法然の眞教義を現はすの意に外ならないのである、されば多くの点で一致しあふるのは當然と言はなければならぬ。

其六 禪宗

禪宗は座禪を重んずるのでこの宗名を得たのであるが、正依の經典といふも

のではない。強いて求むれば釈迦一代八萬四千の法門を初めとし宇宙間の万有はすべて正依の經典である。而してこの宗は不立文字、教外別傳（不立文字とは文字を立てない即ち文字を以てせず、教外別傳即ち文句によらず直ちに直感を以て佛祖の心印を傳ふることを言ふ）といつて教中文字を立てる教は普通教で文字を以てせず、心から心へ直ちに傳へることを以て眞の宗教であるとしてゐる。

支那には曹洞、法眼、雲門、臨濟、を併せて禪門の五家となして居るがこの内臨濟宗は榮西により曹洞宗は道元によりて我國に傳はり隱元が我國に來つて黃檗宗を開いた。

其七 法華宗

法華教を以て至上教とし他の教派を悉く邪宗であるとしてゐる。教義に於て析伏門と攝受門の二門を設けて法華以外に對して破斥すると共に法華の眞髓を攝受顯揚するの途を立て、ぬる。他宗破斥に關し日蓮放徒は次のやうに説明してゐる。

一、念佛無間とは念佛を唱ふれば無間地獄に墮つるとの意で、淨土宗が法華經を以て凡人に至難の難行道となす正法誹謗の大罪によつて無間地獄に墮つるといふ意である。

二、禪天魔とは、禪は不立文字、以心傳心のみを説いて法華經を輕視して居る点で増上慢の天魔であると言ふのである。

三、眞言亡國とは眞言宗が釈迦一代の教を顯密二代に判じ法華經を顯教とし卑近説とし大日如來の密教を深甚とするのは自國の主を棄て、他國の間者となるに等しい点を攻撃したのである。

四、律國賊とは律宗が小乘の四分律（四律の一、六十卷、五部中曇無德部の律藏である、四度にして完結した故四分律といふ）によつて外に持戒を装ひつゝ内節は墮落して居ることを譬つたものである。

尚日蓮宗に三大秘法と言ふのがある。それは本門本尊、本門題目、本門戒壇である。

一、本門本尊とは日蓮宗の本尊である。中央に題目を書き、周圍に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲門、緣覺、菩薩、佛の十界を書いた十界勸請の曼荼羅で

ある。

二、本門題目とは本尊に帰命（身命を帰する）方法で七字の題目南無妙法蓮華經を唱へること。

三、本門戒壇、題目に一切の戒法を包含されてゐるとし七字の題目を以て戒壇とし題目を唱ふれば持戒と同様であるとしてゐる。

第二章 佛教に對する批判

第一節 神 觀

印度に於けりウエゲー教は多神教であり、ブラーマン教は萬有神教であつたが、佛教は唯心論を主張する無神教である。この点よりすれば佛教は寧ろ佛學と稱するを至當とするその目的とするは、大悟徹底し苦樂を超越し生死を超越し、自覺を得て至高の人格に達せんとするものである。従つて自己の修養を第一眼目とし自力によつて畏の目的を達せんとするものなるが故に眞の佛教は無神教である。而して自力により多くの困難なる修道法を遂げ最高人格に達せん

とするには僅少の人の爲めには可能であるが多数人の爲めには頗る不便である。然しながら自己の修養により最高人格に達せんことは至難であるが故に、衆人凡夫の爲めに他力易行の門を開き念佛と礼佛によつて畏の目的を達せんとするが故に茲に佛像の如きを礼拝するに至り佛が他の宗教の神の如き位置を占むるのであつて、而かも佛は覺者を意味し至高人格者を意味し人格を離れたる神を意味せざるのである。

斯の如くであるから至難の修養を横む特種人の爲めには神なきも敢て差支へなきも一般の大衆凡夫の爲めには明確なる崇敬祈願の對象を神を興ふるに非ざれば個人修養の目的とその安心立命を興へ得ざるものである。これを神道の如く神なる崇敬祈願の對象を興へ畏によりて人格を修養せんとするものに比し甚だ不便である。

加之佛教の有する平等觀念に立脚する唯心哲學は個人の理智性を高の思索力を向上し個人人格の完成には至大の貢獻をなすものであるが理智偏重の結果として人の感情性を閑却せしめ又差別觀念を徹して平等觀念を高調するが故に我國の如き感情及び差別觀念に立脚する道德殊に天皇に対する忠、祖先及び父母

に対する孝を道徳觀念を冷却するの恐れあることは注意すべきことである。

第二節 靈魂觀

プラーマン放では靈魂の存在を肯定するが佛教では是を否定して居る。然しながら根本的考察は同一であつて唯だ理窟の附け方を異にするものである。プラーマン教は靈魂なるものが常住存在して既成の世界に出没し人死すれば靈魂はその在世間の行爲により或は極樂に生れ或は人間界に生れ或は禽獸草木となりて生れ常に流轉輪廻すると説くものであるが小乘佛教に於ては自己創造の世界を自己が受け其の中に自己が住んで業をなす次の世界を展開する即ち業力による次の世界を創造展開することが無窮に連續するものと説くのであつて是を輪廻と稱する即ち輪廻再生するを靈魂ではなくして業力の創造展開をなすものであると爲すのであるが輪廻再生するの點に於ては同一である。

又大乘佛教に於ては物は心の内に存する現象の世界で心外に世界の存在を認めないと言ふ唯心論であるが是の心の最後のもの即ち第八識即ち阿頼耶識なる

ものが心作用の根本をなし是の阿頼那識なるものは恰かも種子を蔵する如きものであつて有情體報の果体であり人としての中心の實体であつて人の肉體と精神の根本であり是を統一してゐる本質であつて人が在世間の業の因によりて人の精神的實体或は精神的種果を授けて人死すれば或は極樂に或は人間界に或は動物界に輪轉再生すると考ふるのであつて靈魂の存在を否定するも阿頼那識が輪轉再生することは同一である。

竟畢佛敎に於て靈魂なるものを否定するも人が死して後次の世界に再世すとの考察は同一であつて輪迴説は変化せざるものであつて唯た哲學上靈魂と言はずして或は業力の創造展開であるとなし或は阿頼那識の受くる因果であるとなすも何れも流轉再生するの實体又は力を認むるものであるから是れ亦た靈魂に等しきものであつて人が在生中善業を積めば天界に再生するも人が在生中惡業をなすときは次の世に於て或は植物に或は禽獸に或は人間に生を享けて苦惱に陥まねばならぬと信するのである。是れ即ち地獄極樂説の生する所以であり且つ因果説の生する所以である。

斯の如き靈魂觀を有するが故に人の一生は是の靈魂が肉體に宿る或る一時期

であつて流轉する靈魂より見れば假りの宿たるに過ぎぬこれが爲め人生の現實を輕んずるの思想を生じ寧ろ人間界を去つて速かに他の世界に再生せんことを欲し努力を拂はずして死を急ぐの風をなす現實を悲觀するのみなるが故に人生の意義を没却し努力を拂はずして徒らに未來のみを憧憬するに至るのである。これに佛敎の靈魂觀によれば個人の善行を積み徳義を進め得るも現實を輕侮するが爲め人生を輕んずる爲め十全なる努力をなししむるを得ず、斯の如き個人より成る國家は遂に衰亡せざるを得ぬのである。

第三節 世界觀

佛敎は人生の現實世界の外過去及未來の世界を豫想し是を三界と稱する。是れ靈魂の不滅を信する結果より生ずるものであり空間的世界ではなくして時間的世界である。

又佛敎は苦樂の世界を豫想して六界となす。

地獄
餓鬼
畜生
修羅

苦の世界

人間苦樂の世界
天上樂の世界

而して苦の世界に四等の區分を附することは人生を苦なりと観する結果多くの苦の世界を豫想するものであり而して地獄と極樂の如きは説明を要せざる自明の眞理なりとなすものである是れ亦靈魂觀及び輪廻説より來るものである。

第四節 人生觀

佛敎は今日迄幾多の疫遷をなして居るがその人生觀に關しては毫も變化をなして居らぬ、釋迦は人生を以て生苦病苦老苦死苦として人生は一切苦であるとなして居る、而して是が佛敎敎義の出発となつて居る。換言せば人生は一切苦

であるがそれは何故に苦であるかの問題及び是の苦を脱せんには如何にすべきやの問題に對し答解を與へたるものに過ぎぬ、

斯の如く人生を一切苦と觀することは現實の悲觀である。我が神道の如き現實を樂觀するものとは正に正反對である。而して佛敎に於ける現實の悲觀は同時に諸行の無常を觀し萬有現象の疫轉極りなきは眞理であるが然しながら是の疫轉極りなき現象をも悲觀し春花の樂むべきを觀せずして寧ろ秋月の悲むべきを觀するにのみ傾くことは必ずしも人生の一面の姿のみたる憐見であつて人生は苦樂共に存し悲喜共に存するものであることを知らざるものである。加之斯様なる人生に對する悲觀は人の活動力を減殺し人の精神を萎靡せしめ遂に人生は靈魂流轉の一期であり靈魂旅程の一宿たるに過ぎずと觀するの極努力を拂はずして寧ろ死を急ぐに至ることは個人として其適當ならざるのみならず是を國家的に見るときは遂に國民精神を萎縮して國家の發展を阻害するものである。我が神道の如き彌蒙の精神により生々發展と現實の努力を高調するものに比し正に正反對である佛敎を奉じたる印度アーリヤ族は遂に蒙古の征服を受け土耳其の征服を受け英國の殖民地となりたる亦怪むに足らざるものである。

佛教創始以前印度に存在したるヴェダ教及ブラーマン教は印度アーリヤ族の有する民族宗教であつてアーリヤ族の血液の純潔を保ちアーリヤ族の結束を保持する純多道徳上の觀念が存在したか、佛教に至つては最早民族宗教ではなく民族や國家を超越したる世界宗教である。それ故に釋迦の説ける佛教に於ては民族や國家に對しては何等の執着もなかつた現に釋迦のその在生中その生國たるカピラ國が他の種族の爲めに亡ぼされたるを見ながら是に對して何等の努力も拂はなかつた。従て忠君愛國の如き國家的道徳觀念は毫も存在しないのである。これこの宗教が我が國の道徳と一致せざる所である。

又佛教に於ては既記の如く人は在生間の業によつて死後或は人間植物禽獸間に流轉し或は極樂界に安住すると考ふるが故に彼等には父母の觀念祖先の觀念も頗る稀薄である阿含經の一部には父母を敬愛すべきことを説きあつても是れは單なる報恩觀念より出發したるものであつて、我國神道の如き熱烈なる祖先崇拜

の觀念より來るものにあらざるが故に父母に孝を盡し祖先を敬ふ如き道徳が高調せられざるは當然である。是の點に於ても佛教の道徳観は我國に適せざるものである。

佛教に於て最も高調せらるゝ道徳は利他と慈悲とである。佛教は窮極に於て没我の境涯に到着せんことを放ふるものであるから自己を没却して他人を利せんことは佛教の主張する所である。従つて佛教にては偷盜を大なる不道徳と認むるのである、然しながら没我觀念を極端に擴張せば自我を没却し自己の存在を否定することゝなるが故に現實を悲観し速かに往生して極樂淨土に赴かんことを希求する觀念となり現實の努力を無視することゝなり克己勤勉努力等の道徳觀念を無視することゝなる。

又佛教の高調する慈悲觀念はその靈魂觀より來るものであり靈魂は人間並に動植物に至る迄流轉するが故に動植物に至るまで愛憐を加ふるを要することとなり茲に慈悲觀念を生ずる従つて佛教に於ては殺生を以て第一の不道徳となし戒律の第一位に置く所以である、是れ佛教の戒律中には邪端妄語惡口貪慾瞋恚邪見等を以て不善となし是を身口意の三業と稱して居るは是れ一般の道徳であ

つて他の宗教と大に異なるものがないのである。

概言せば佛教に於ては解脱と涅槃とに重きを置くが故に戒律なるものは修道の一部介であり従つて基督教の如き強き道德觀念に比し頗る薄弱である。

第六節 批判の綜合

是を要するに佛教が有する最大の長所はその高遠深奥なる哲學であり、而してその最大の短所は現實の悲觀と靈魂觀と道德觀とに存する。而して佛教の目的が個人人格の完成にあるがその出发点たる現實の悲觀が人を厭世觀に陥らしめ人をして徒らに極樂淨土なる死後の世界ののみを翹望せしむる結果遂に現實に對する努力を缺き遂に國家をして衰亡に陥らしめたるは歴史的事實の示す所であり且つ斯の如き靈魂觀と道德觀とは人の絶対平等觀念を高の我國に於ける血統道德即ち父母に孝に君に忠なる道德觀念祖先崇拜の觀念を破毀し我が國家存立の基礎を危からしむるものである是れ等、の如き國家主義を高調せんとする者に於て佛教に嫌厭たる所以である。

畢竟將來佛教は學問即ち哲學として我が國に於て發達すべきものであつて宗教としては我國に適當せざるものである。

第三章 基督教の梗概

第一節 基督教の創始及發遷

ユダヤ人の祖先はヘブライ人である。ヘブライ人はもとカルデア地方に居住して居たが西紀元前二千年頃には酋長のアブラハムが長を率ひて「ユーフラート」河を超へてカナンの地に移住した當時ガナン（パレスチナ地方）の地にはセシチック人種の一種族たるカナン人が住んで居つたところである。このカナン人は日の神バールを農業の神として祭れるバール宗であるのにヘブライ人はエホバ神を信じて居るので宗教上の争からヘブライ人はひどく苦しめられた。その後埃及王の許を得てナイル河の下流に移住してこゝに住んで居たが紀元前千三百二十年頃埃及王がスエズ地峽に外敵防禦の城壁を築かんとして之をヘブライ人に命ず

るや神の外に仕ふべきものなしとして人類の平等を信するヘブライ人は王命に従はなかつたので遂に追はれて又もやカナンの方に移住した當時カナン人は内訌のために防ぐことが出来なかつたのでヘブライ人はその虚に乗じて土地を平定した、そして土地を十二の氏族に分け宗教の力によつて畏を統一した。

ヘブライ人は元來信仰の篤い理想主義的熱情に富んだ民族であつたら、かく國が十二の族に分れて居ても別に相争闘する程のこともなかつた。しかし一の國家として堅固なるものである爲めには中心人物が必要である。そして不思議にヘブライ人中には豫言者と稱する人物が現はれて民族の中心となり宗教的統一の實を行つた。

紀元千餘年前、サムエルといふ異常な力をもつ豫言者が現はれてヘブライ民族の統一を行ひベンジヤミン族のサウルを擧げて王位に即かした。それが紀元前千五十五年である。しかし間もなく「サウル」は「サムエル」と合はずして追はれエゲヤ族のダビデが王となつた。

ダビデは紀元前千五十五年から千十五年まで四十年間王位にあつて國力を養ひ附近を攻略し遂にエルサレムを占領してこゝに都を移した。

ダビデの死後末子「ソロモン」が位に即いた。「ソロモン」は非常に榮華を極めたがしかし賢明の人物であつた、そして政治的手腕にもすぐれ領地内のカナンのパル宗を信することを禁じなかつたし埃及王とも親しく交はり外交に内治にその手腕を發揮した。

しかし餘りに榮華を極め多くの重税を取りたてた爲めに次第に國力衰退しソロモンが死するやヘブライ人は内訌を起して南北に分裂した北方のはパレスチナの北方の十族でイスラエル王國と稱した。是に対して南方のエゲヤとシオンの二族は合同してエゲヤ王國を建立した時は紀元前九百七十年頃である。

然しこの分裂は民族をして致命的に弱めたこの虚に乗じてエジプト人はエゲヤに侵入して思ひのまゝにソロモン王朝時代の財寶その他を掠奪したその上にカナン人のパル宗とヘブライ人のエホバ宗との反目争闘が再発したのでエゲヤ國は最早滅亡を待つばかりの状態となつた。そして北部のイスラエル國が先づ紀元前七百二十年頃アッシリヤに亡ぼされ南部のエゲヤ國も紀元前六百三十九年から六百八年頃迄はヨシアの治績上り一時平安であつたが間もなく埃及のために征服せられその支配を受くる状態に至つた、その後埃及がバビロンに滅ぼ

されたので更にバビロンの属國となつた。ところが二回もバビロンに叛いたのでバビロン王は大に怒つて徹底にユダヤを亡ぼしエルサレムを焼き多くの入々を囚虜としてバビロシへ移したこれが紀元前五百八十六年の事である。

この國家的滅亡はユダヤ民族に深刻な影響を與へた。併しかゝる試練にあつて彼等の信仰は毫も衰へないのみか益々磨かれていつた。紀元前五百五十年頃バビロンはベルシヤに滅ぼされ同じく五百三十八年ベルシヤのクロス王の爲めに許されて故郷のバレスチナに帰ることができたがその時は最早再び前のやうな民族的國家を獨力で建設する力もなく或る意味でユダヤ民族は危機に瀕した。しかも其の危機がユダヤ民族獨特のユダヤ教形成に與つて力があつたこの危機は豫言者ハガノ、サカリヤ次いでエツラ等の宗教的天才を生みユダヤ教は急速の奇産をなした。

その後ユダヤ民族は再び諸國に蹂躪せられアツカビースの擧やアスモニヤン王朝の策立から遂にローマに屬するに至つた。その間建國以來約千三百年、しかもユダヤ民族の國家的隆盛を示したのはダビデとソロモンの二王朝の数十年間だけである。

斯様なるユダヤ民族が羅馬帝國の附庸となつて居つた間に「イエス」が猶太人中に現れて従來のユダヤ教が徒らに形式に流れ猶太教の精神を失ひて墮落したるを憤慨し至る處に説教をなしたその教を弘めたるものが即ち基督教である。然しながら「イエス」は餘りに現在の猶太教を非難攻撃したるが爲め遂に磔刑に處せられた。

爾後「イエス」の弟子たる十二使徒が希臘羅馬埃及等の諸地に遍歴して基督教を弘通し羅馬に於ては非常なる迫害を受けたが是に屈せずして益々發達し西紀第五世紀に於て西羅馬帝國を中心とするローマ教とに分れ西羅馬帝國滅亡後ローマ教の最高教主たる法王はその後を継ぎて諸國帝王の上に位して大に權力を揮ふたが諸國帝王の權威發達するや彼漸く衰へ中世紀を過ぎて第十六世の初頭即ち一五一七年「マルチンルーテル」の起つて宗教改革を唱ふるや是に新教を生じローマ教と対立するに至り是を旧教と唱ふるに至り爾後百年戦争等宗教上の争乱があり現今に於ては新旧兩教は西政に相對立をなして居る。

又希臘教はルーマニヤ、セルビヤ、ロシア國等に弘通し殊にロシア國はギリシヤ教を國教となしロシア國王を教主となす政教一致の宗教となしたが欧州大戰

彼露國の革命と共に是の國教を排斥して無宗教國となし以て今日に及んで居る。

七八

第二節 猶太教の放義

其一 猶太教の聖典

上記の如く猶太教はユダヤ民族間に於て自然に發生したる宗教即ち民族宗教であるが基督教の前身であるが故に基督教と通有の多くの思想を有するそれ故にユダヤ教の聖典は旧約聖書として基督教の新約聖書と對立し而かも基督教徒が新約聖書と共に是を尊奉するものである。該聖書の成立は明瞭でないがユダヤ民族のベビロンの浮囚よりパレスティンに帰還せる後であらふと言はれて居る。該旧約聖書は左の如く三部三十九卷に別われて居る。

律法 創世記、出埃及記、利未記、民数記略、申命記（以上モーセの五書と稱す）

預言書 約書亞書、士師記、サムエル前後書、列王記略上下、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書及び十二の小勝言書、

「聖文學 詩篇、箴言、約百記、雅歌、路得記、哀歌、傳道の書、以士帖書、但以耳書、以士喇書、尼希米亞書、歴代志略上下、

其二 エホバ

ユダヤ教の教理は上記の律法預言書、聖文學に現はれてゐるが一言にして言へばエホバを信する一神教である。彼等はエホバの存在については殆んど何等疑ふことがなかつた従つてその存在を證したり試みやうとしたことはなかつた。かくてエホバはユダヤ教の中軸となり唯一の信仰の對象となつたのであるが旧約聖書はエホバが普通の人の如く悔い怒り嫉み憐れみ愛する甚だ人間味のある神として記してある。ヤコブと相撲をとつて負けたといふやうなことも記して居る（創世紀三十二の二十四）一方またエホバは全智全能でイスラエル民族の指導者であると同時に世界の支配者であることも確信を以て記して居る。しかしこのユダヤ教のエホバの特色はその倫理的性質にある即ちエホバはイスラエルの民族によつて全人類を救はんとするものである、といふ信仰である。單に世界支配の神であるのみならず世界人類を救ふ神であるといふエホバの倫理的性

七九

質はユタヤ教の特色である、更にこのエホバがイスラエル民族のみに顯現するとしてゐるところにユタヤ民族の宗教的民族主義がある。

然しながらエホバがイスラエル民族のみに顯現するといふ考察はエホバが世界人類救済の神であるといふ本來の性質と矛盾したことになるからユタヤ人中の學者は漸くこれに疑問を持ちはじめ同時にギリシヤ思想の影響をも受けてエホバは天使をして人類に交通するもので單なる一種類の榮達發展のみにかゝはるものではなく一切の生物を愛するものであると考へるやうになつた、また波斯思想の影響をも受けてエホバを以て善神とし他の多くの民間に崇拜された神を悪神としてエホバを惡に対して勇しく戦ひ終局の勝利を得る道徳神と信じ純粹の倫理的性質を與へてこれを信するやうになつた。

其三 救世主及び終末論

救世主觀及びそれに伴ふ終末論（又は末事論）もユタヤ教特有のもので、これが後にクリスト教の神の審判の思想となつたものである。「救世主」とはメシヤと稱しギリシヤ語の「クリスト」と同意義であるイスラエル人は豫言者の豫言

によつて偉大なる「メシヤ」が出現し「エルサレム」を中心として全人類を統一しイスラエルを中心しエホバの國が建てられエホバに選ばれたるユタヤ民族は永久に神の榮光を受けるといふ思想を眞面目に信じて居た。これは一つは常に民族的逆境にあつて苦痛のみを嘗めて居るユダヤ民族の必然の要求の具現でこの「メシヤ」觀を信じエホバの救を信じ、多くのユダヤ人はその不幸の生涯を堪え忍んだのである。だからメシヤに対する信念は彼等の心の糧であつた。終末論はこのメシヤ觀と不離一体のものである。即ち今世界は惡魔や異端が蔓延して居るがやがてエホバの意志を體現したる救世主が現れて全世界を征服する。かくて世界はこゝに亡びエホバの選民たるユタヤ民族へイスラエル民族のみ独り勝利者メシヤの王室の下に榮えるであらうといふのである。

この終末論に対してペルシヤバビロンの宗教的影響によつて現はれた一種の終末論がある。それは紀元前二世紀の頃起つたもので神の勝利と世の終りとを説き、をほろけながらその年限をも示してその必然性を強めたのでユダヤ民族は世の終りが來てエホバの裁判の日があると言ふ豫想の爲めに熱叫して終ふほどであつた。しかしこのペルシヤバビロンの影響を受けた終末論は次第に普遍性

を帯び現世の一切は罪惡に充滿して居る故にやがて来る最後の日には一切が亡
びて終ふとなしエタヤ民族のみ榮光を授けるといふやうな特權をも認めなくな
り超民族的のものとなつた点でイスラエル民族の民族的精神より世界人類的精神
の跳躍を刺戟するに力があつた。

要するに終末論は一種の道德的大警告であつてこれによりエタヤ民族は不斷
にその信仰上の精進を行はしめられた最後の日、神の裁きの日、その日に備へる
ために益々宗教的修業を心懸けたのである。これ等の終末觀が同時にクリスト
をして起せしめ「天國は近づけり悔ひ改めよ」の叫びを擧げしむるに至り新し
い「クリスト」教をも生むに至つたのである。

其四 民族意識の高潮

最後にエタヤ教を概観して感ずるのはそれが民族の發達とか幸福とか言ふ民
族的見地に立つて居ることである。佛教の如く自己の安心立命といふことを最大
の眼目として居るものとは著しく相違して居る。そしてこれはエタヤ民族が集團
意識に富んで居ることを証明して居る。尤もバビロニア俘囚以後は國家を離れ

て國民的意識を失つた爲めに漸く個人乃至自我の觀念が強まり個人の宗教的位
置についても考察するやうになつた形迹があるがそれでも猶ほ民族全体の統一
と榮光といふエタヤ族の眼目たる根本特色は嚴として存在して居る、この民族
的精神、集團的意識こそはエタヤ教の特色でこの精神の發展がやがて後にクリ
スト教の全人類的精神となつたのである。

第三節 基督教の教義

其一 基督教の聖典

基督教はイエスキリストの創始したる宗教であるが、實はエタヤ教に對する
宗教改革に過ぎず従つて基督教の教義はエタヤ教の教義と相通するものであつ
てエタヤ教の思想を継承したるものであるが、當時エタヤ教は墮落し形式に流れ
その根本精神を失したるが故にクリストは是を復活せしめエタヤ教の神なる工
ホバを彼の神と稱し人の父であると稱して神と人とを接近せしめ是の神人接近
神人合一によりて道德的墮落に傾したる人類を救はんとし且つ是の宗教を超國

家的ならしめたものである。

イエスキリストは西紀前四年（皇紀六五七年）ユダヤ國ゼルサレム附近の村落に生れ長ずるに及び自ら救世主（メツシヤ）なりと稱し四方に遍歴し説教したるがユダヤ人はクリストを以て僭稱者となし是を羅馬派遣の知事に告げて傑刑に處した時正に西紀二十九年（皇紀六八九年）であつた。

基督死後其の弟子たる十二使徒は諸國に歴遊してクリストの教を弘め就中ギリシヤ及羅馬に布教し遂に歐洲諸國の宗教たるに至つたのであるが、後クリスト及びその使徒等の言行書簡等を集めて聖書を作り更に西紀三百六十三年に至り「ラオデキヤ」で開いた宗教會議で舊新兩約の目錄をつくつた時漸く聖書の形を成し更に三百九十七年「カルセージ」で開いた宗教會議で黙示録をも加へ今日存するやうな二十七卷より成る新約聖書が制定せられたのである。

新約聖書は合計二十七卷歴史書翰黙示録の三つに分れて居る。

歴史 イエスの言行を録したるもの

マタイ傳福音書 二十八章

マカ傳福音書 十六章

四福音書

書翰

ヨハネ傳福音書 二十一章

ルカ傳福音書 二十四章

使徒行傳二十八章は使徒の行蹟の記録である。

ローマ書 十六章

コリント前書 十六章

コリント後書 十三章

ガラテヤ書 第六章

エペソ書 第六章

ピリピ書 四章

コロサイ書 四章

テサロニケ前書 五章

テサロニケ後書 三章

テモテ前書 六章

テモテ後書 四章

デトス書	三章
ピリモン書	一章
ヘブル書	十三章
ヤコブ書	五章
ペテロ前書	五章
ペテロ後書	三章
ヨハネ第一書	五章
ヨハネ第二書	一章
ヨハネ第三書	一章
ユダヤ書	一章

合計二十一巻 百二十一章

使徒等の教會や個人に贈つた書翰である

黙示録 ヨハネ黙示録二十二章 これはヨハネが幻影に見えたと云ふものを録したものである。

其二 ゴツド

クリスト故で説くゴツドとは如何なるものが、是は甚だ廣汎な問題で且つ流派や時代によつて色々に違つて居るので簡単に説明することは非常に困難であるが、クリストはゴツドの内容については殆んど抽象的の説明は下さず、その存在は具体的で人心に内在する實際的生ける力であり同時に各人を温かくはぐくみ育てる廣大無邊の力であると先天的本能的に信じて居たやふである。クリストのゴツドの觀念もかなりユダヤ教の影響を受けてゐる。

然し當時のユダヤ教は非常に腐敗して居つてエホバの觀念もひどく超越的のものとなり人とエホバとの間が主人と奴隸の如き關係となつて居てその間に温き交通がなかつた。唯エホバは嚴かに命令しそれに背くものを嚴罰する峻嚴な超越的存在のやうに考へられた。それをクリスト故はゴツドを人間に接近させゴツドを「父」と呼んで神人の關係を父子のそれの如く接近させることに努めたのである。

クリストはゴツドは全人類の父であつて一國家一民族のものではない神を信

じ畏に絶るものは一様に神の子であるとカ説した。

尚ほクリストはゴツドはその子によりて自らを表現することを説いた。即ちクリストは神の代辨者であつて父なる神は自己を遣はして自己を通じてその廣大なる意志と愛を現はさふとしたと主張して居る。従つてクリストは自らを以てメッシヤ即救世主となし猶太教では救世主を後世に來るものとして畏を後に求めたがクリストは現在の自身が救世主なりと主張した畏が猶太教と異なる所である。

其三 三位一體論

クリスト教では父、子、聖靈の三を以てゴツドの三位一體論を立て、居る。父とは天の父、子とはキリスト、聖靈とはゴツドの靈の意味である。

「願クハ主、耶穌キリストノ恩トゴツドノ愛ト聖靈ノ交リ衆トトモニアラントヲ」パウロの語

即ち天の父、キリスト、ゴツドの靈、この三者は一体であつてゴツドとはこの三位一體なるもの、總稱に外ならぬ。換言すればゴツドは一個の神格であつ

てその性質は父、子、靈によりて顯現される三面を有するものであるとなすのである。

ゴツドの靈は選はれたるもの、上に顯現するもので福音書はクリストの上にゴツドの靈の活動したことを記して居る、即ちクリストは聖靈によりて生れ、聖靈の守によりてすこやかに成長し三十歳の時洗禮を受けたがその時の靈が鴿のやふにその上に降つたのを「ヨハネ」は見たとある、そして多くの奇蹟や教訓事蹟を聖靈の働きに帰してゐる。

其四 原罪論

クリスト教では人間の罪といふ觀念、即ち人間は多くの罪に汚れたものであると云ふ觀念が非常に強い人は皆罪人である従つて其の罪を自覺し臨時も神に向つてその救済を祈るべきであるといふのはクリスト教の根本的教理の一である。

この罪の觀念の発達と共に肉体を卑しむ風を生し肉体は罪の中心で靈魂は善の中心であるといふやうな肉体蔑視、精神過重の傾向を生じた。

クリスト教はかくの如く人を極端に罪深いものとしてしまつたが然し單に人を罪人視してのみではなほ同時に神より與へられた宗教的良心によつてこの罪深い身を淨化して救はれることができるといつて救済の可能に對する信仰をも放へて居る。この人は罪深いものであるに拘はらず、尚ほ人はその罪の深淵に躍して救はれ得る宗教的良心をもつて居ると力説して居る點にクリスト教の力強いところがある。

其五 人類愛の高調

基督教の信仰の對象を「ゴッド」は慈愛に充ちしむる神であつてクリストは神を人の父と呼び而して人を神の子と呼んで居る。即ちその關係を父子の關係となし即ち「ゴッド」を人とは愛情を以て繋つて居るものとなして居る而して人と人との關係も亦た愛情を以て繋るものとなして居る一言にして言へば基督教の教は人類愛の教である。

基督教の神は其子たる人に対しその愛により左の性質を有するものであると放ふるのであり、

一、神はその子たる人の要求を満足せしむるものである。馬太傳に曰く「汝等ノ子ハ悪クトモ汝等ハ善キ賜ヲ其子等ニ與フルヲ知ルマシテ天ニイマス汝等ノ父ハ求ムル者ニ善キ物ヲ賜ハザランヤ」

と言ふは汝等の父は神であつて善き賜物とは靈の恵を意味するのである。

二、神はその子たる人を教育し訓戒するこれは當然のことである。

三、神はその子たる人と親しく交る神が人から遠ざかることは神の本意でない神は愛の神であるからである、而して人は祈禱によりて神に近づくことができる、神も亦祈禱によりて人に近づくのである、馬太傳に曰く「祈ノトキ何ニテモ信シテ求メハ悉ク得ラルベシ」と言ふもの即ちそれである。

四、神はその子たる人の罪を赦す神は愛の神であるから人がその罪を悔み改むれば直ちにその罪を赦すのである。愛の神は寛大なる精神を以て悔悟の子供に逢ひその歸り來るを喜び迎ふるが如き態度である馬太傳に曰く「人若シ百匹ノ羊アランニ其一匹迷ハバ九十九ヲ山ニ置キ往キテ迷ヒシ一ツヲ尋ネサルカ若シ尋ネテ是ニ逢ハバ迷ハサル九十九ノ者ヨリモ尚ホ其一ヲ喜ハン」

斯様なる神であるから「ゴッド」の子たる人は幼兒の如く純潔無垢のものとなり、

ひをすらゴツドの恵にすがるものでなくてはならぬ馬太傳に曰く

マコトニ汝等ニ告グモシ汝等翻シテ幼兒ノ如クナラズバ天國ニ入ルヲ得ジ
即ち幼兒の如くなりてゴツドを愛し應ての要求をゴツドに捧げよと言ふのであ
る。而してゴツドの子をる人は祈禱によりてゴツドに近づき懺悔によりてゴツ
ドに赦され迷へる時はゴツドによりて指導せられ危難に逢ふときはゴツドによ
りて保護せられ斯の如く信頼するときはその名が天に録せられ死して天國に歡
くを得ると教ふるものである。

又人の人に対する愛に就ては人のゴツドに対する愛と相關して居るゴツドは
父であつて人はその子であるからゴツドの前に人々は一樣に兄弟である。従つ
て互に愛し合はなければならぬ人の子が父なるゴツドを愛するのが必然であ
る如く兄弟である人間同志が愛し合はなければならぬ、馬太傳に曰く、「汝の
隣を愛し汝の仇を憎むべしと言へることあるを汝等聞けり。されど我は汝等に
告ぐ汝等の仇を愛し汝等を責むるものゝ爲めに祈れこれ天に居ます汝等への父
の子とならんが爲めなり」と言ふものそれである。

斯の如く神の愛及び神への愛を基本とする四海同胞の精神は基督教の根本的

教理である。

其六 義務及犠牲の高調

斯様にして基督は人に対しても亦義務を放ふる。即ち人はゴツドに對すると
同じくその最大の愛を人に捧ぐることを最大の義務とするのである。「己ノ如ク
隣人ヲ愛セヨ」はその總である。而してこの愛は心からでなければならぬ。その
動機は正善、その心は清潔であつて眞の同様から出でねばならぬ心ならざる恩
恵はその價值なく暗悪は殺人罪に直りと教ふる又愛の爲めに犠牲的奉仕の必要
を説き諭し人の救、助なき人の待遇病める人の慰藉、獄にあるもの、訪問悩
める人の慰問等をなし又教育傳道及び罪より靈を救ひ出す等の靈的奉仕を放ふ
るのである。

更に基督教は逆境に立ち不法を蒙りたる時謙遜と忍耐とを以て是を處し損害
を蒙りたる時はを救免せよと教ふるのである馬太傳に曰く

悪シキ者ニ抵抗フナ人モシ汝ノ右ノ頬ヲ打タバ左ヲモ向ケヨ

汝ヲ訟ヘテ下衣ヲ取ラントスルモノハ上衣ヲモ取ラセヨ

人汝ヲ罵リ又責メ許リテ各様ノ惡シキコトヲ言フ時ハ汝等幸福ナリ、喜ビ喜
ベ天ニテ汝等ノ報ハ大ナリ、

と言ひ倫理道德を高調し且つクリストはゴツドと人との間に立てる特種のゴツ
ドの子である。即ち「クリスト」はゴツドの信認せる子であつて且つゴツドの子
として完全なるものであると信じたのである。而して普通の人には「クリスト」
により父たる「ゴツド」を知ることを得る。即ち「クリスト」はゴツドと人との
仲介者であると信じたのである。

其七 神國

猶太教に於ては来世に於て神の國なるもの、存在を信じて居つたが基督教に
於ては未來の神國の外に現世的内在的精神的なるものとあるとなし得よふであ
る。

而して内在的神國とは心内に於ける神人調和の境地を意味し外在的神國とは
内在的神國が全人類の総の人に顕現し一様に博大なる神の愛の下に生き得る未
來の理想の理想的境地を意味して居るのである。

第四節 基督新放の教義

既記の如く歐洲第十六世紀の初頭に於て基督教に大なる改革をなしたるもの
はマルチン・ルーテルである。彼は多くの學殖をもつてゐたことは事實であるが
それよりも直覺的に眞理を洞察し極めて率直に表現した点に彼の卓越性がある。
ルーテルは

- 一、律法も福音も嚴格に區別し神とキリストに對する信仰により律法の強ひる外
的束縛から離れて靈の自由と内心の平和を得べきことを力説し
- 二、眞信仰を内的義として眞善美の淵源とし
- 三、自由を以て神の賜とし人は自己の信仰と愛によつて生きるものであると云
つて居る

この三つの論據から左の諸点を指摘して居る。

第一、法王は恣に人を罰する資格もなく放す資格もない。若し法王にその資格が
ありなら教會監理の信徒も法王と同一の権能がなければならぬと云つて法

王の至上権を否定し

九六

第二、教會の財産を法王が勝手に賣却するは神に對する冒瀆であるとなし。
第三、法王が神人の媒介者と稱するの甚しき僭越なることを論じ、
第四、かゝる法王によつて組織されてゐる宗教會議の絶対権を否定し、
第五、僧侶の手によらなければ懺悔や赦免が實現されないと云ふのは不合理である神人の交通は僧侶の手を借らなければ實現される眞に心から懺悔して神に祈れば何人の媒介がなくともその祈は必ず神に聴かれ神は許し給ふと主張し
第六、聖晩餐及び洗礼の儀式に於ける形式そのものには大なる意義はない形式は内部的精神の表現としてのみ存在の價値がある従つて若しその内部に眞の信仰をもつて居なかつたら形式的に何をやつても畢竟それは無意義である、唯歸する所は形式を行ふ人の眞の信仰の有無にあると論じた。
これ等のルーテルの獅子吼は畢竟するに宗教上の精神主義及びそれに由來する自由平等主義に立立つるものである。従つてクリスト教會内に於ける專制主義を否定し階級的差別を否定したのであつて、その主張に當つて寸毫の妥協もなさなかつた点に彼の革命家的性格が存する彼は信者は悉く僧であるといふ信仰を

もち各人は皆直接神と交通するものであると固く信じて居た。従つて僧侶及び法王の特権を否定せねばならなかつたのである、且つ彼の卓越した點は教會の仕事に野に耕す農夫や家事に従ふ婦人の仕事と同一視して居ることである、彼は職業に貴賤の別を認めなかつた、家事に勞するも野に耕すもいつれも神に仕へる道であるといふ大い合一的平等主義を持してゐた。その根本は眞の生命的信仰、クリストの精神、聖書の精神に即した活動的、内面的、精神的な宗教を信ぜんとする深淵たる理想主義的精神の躍動に外ならないのである、一言にして是を言へば基督新教は基督教本來の面目に復歸したるのみである、

第四章 基督教に對する批判

第一節 神觀

基督教の放ふる神は「ゴッド」である、是のゴッドは天地萬物の創造者であり、天地萬物の心であり、天地萬物の支配者であり且つ慈愛熱情を有する絶対者である。概するにゴッドは完全に統一されたる最高の

九七

人格を有し且つ人間の父であると稱する。

九八

斯くの如く神を絶対者であると観するが爲め神に對し總ての人は一切平等である。と観するのである。これが猶太教以來の傳統であつて人は「ゴツト」の命令には服従するが人は人の命令に服従すべきものでないとの思想を生じ是れが猶太人が埃及より追はれたる所以であり又猶太人が完全なる政治組織をなす能はずして國家中心の存在を認めずその國家を弱めその國家を滅亡せしめたる所以であり且つ宗教改革によりて基督教の本旨を認識したる以後に於て歐洲の君主政治を廢して民主政治を成立せしめたる所以であつて人は神の命令には服従すべきも人は縱ひ帝王たりと雖も同じき人であるから是の命令に服従するを要せずとの思想から來りたるものである。

斯様な神観は歐米人の如き理智に偏したる性格者が生みたる思想であるが我が國民の如き感情を重んじ血統を重んじ祖先を崇敬する性格者の有すべからざる思想である。殊に我國の如く天皇を神なりと信する國民に於ては基督教の絶対神観より生ずる總ての人は平等なりとする人間観は我國に於て多くの危険性を有することは當然である。且つ斯の如き人の平等観は國家の政治組織を弱め豫

言者の政治又は民主政治をらしめ國家を衰頹せしむるのであつて猶太民族の歴史が是を證明するものである。

又ゴツトは人の父なりとする観念は神と人とを接見せしむるに預りて大なる功果あるも人が實際に於けるその父母に對する観念と混淆し爲めに「ゴツト」を父として仰ぐもその實際の父母は我等と同等のものなりと誤認せしめ實際の父母に對する敬愛の念を冷却せしめ我國に於ける忠存を以て道德の本源なりとなす思想を破壊せんとするの恐あるものである。是れ畢竟歐米人の如き理智に偏するもの、思想であつて我が國人の如き感情を以て道德の本源となすもの、観念と一致せざるものである。

要するに歐米人は一神教を以て進歩したる宗教なりと観するは歐米人の理智に偏したる思想であつて我民族の如き感情を以て道德の本源となす思想と一致せざるものである。

第二節 靈魂觀

基督教は佛教と同じく靈魂の不滅を信するものである。而してこの靈魂は現

九九

世に於ては人に宿り人の心は靈魂の顯現であり人の主体は靈魂でありとし而してこの靈魂はゴッドとその性質を同ふしこの靈魂を練磨し修養すれば人はゴッドとなり得るものであると信ずるものである。従つて人はその罪を拂拭して死すればゴッドに成り得るものである。従つてこの靈魂はゴッドの國に到りて至樂の生活をなすものであると信ずるのである。斯くして未來の世界を豫想するものである。これ宗教としては斯く信ずるを至當とすものである。

第三節 世界觀

基督教は佛教の如く過去の世界を豫想せざるも未來の世界を豫想するものであつて従つて二個の世界觀を有するものである。一は現實世界であつて是を人の國と稱し他は死後の世界であつて、是を神の國と稱する。現實世界は苦樂の世界であり神の世界は光明ある樂土なりと思考するのである。而して人はその犯したる罪を悔悟し懺悔して良心に立ち帰れば人は死後神の世界即ち天國に到り得ると觀するのである。然しなから罪を悔悟せざるものは死してアンフエール（地獄）

に到着すると觀するのである。

斯様な未來の世界を豫想することは宗教上必要なることであり道徳を進め人格を高尚する所以である。是の點に關しては佛教より優れるものあるを見る。然しなから神の國を豫想する結果として現實の人間以外に神國の存在を認るが故に政治上二元觀を生じ寧ろ現世の君主に服従せずとも未來に於て神國に至り神國の君主に服従すべしとの思想を生じ、是れ亦た政治組織を薄弱ならしむる根源をなすものである。

第四節 人生觀

基督教の有する人生觀は佛教の如き悲觀のものではないが亦た樂觀のものでもない。彼等は人生に於て幾多の悲痛事の存在するを肯定する。而かも苦樂、悲喜の如きは問題とするに足らぬ。人生の目的は人格の完成にある。而して是の人格完成の爲めには悲痛事は必要である。困難なくして人格の練磨はなし能はぬ偉大なる人格は悲痛事を踏破し克服したるものに於て生ずる。イエスは明かに是が証跡

を示して居ると観するのである。斯くの如くなるが故に人生に於て悲痛事の存在するは人格完成に於て必要なりとなし是を征服し克服することを要すると観するるのであつて人生の悲観を肯定するもこれを克服せんとする積極的態度に於て著しく佛教と異なるものである是れ基督教か努力と勤勉と克服とを高調し人生をして意義あらしむる所以である。

斯様なる人生観は基督教を奉したる歐米人を以て努力せしめ奮闘せしめ奮達せしめ今日の如き隆昌を得せしめたる所以である。

第五節 道德観

基督教の教義は原罪説に出発するものである。即ち始めて人となりしアダムイアが神の戒に従はずして木の實を食したるにより人は初めよりして罪を有するものである従つて如何なる人も生れながらにして罪を有するものであると観するるのであり而して斯の如く人は罪を有するか故に罪を滅してゴツドに到達するをその目的となすものであるそれ故に基督教の有する道德観は頗る峻烈であ

り嚴酷であるが然しながら道德実践を以て第一義となす宗教より見れば如何なる人も微罪なしとは言ひ能はぬ。神に対して聊かも良心に恥つることなき人は甚だ僅少であらねばならぬ。この意味に於て原罪説は甚しく不當ではないが人生れて未だ意識明瞭ならざる赤子嬰兒までが罪ありとするは酷かも知れないが然し道德を高唱する宗教としての信念は斯くあらねばならぬ。斯の如くであるから基督教の道德に対する觀念は頗る嚴酷であり峻烈である、新約聖書中に於ける「人善ヲ行フコトヲ知りテ行ハサルハ悪ナリ」と言ひ「人ヲ憎ム心ハ即チ人ヲ殺スト同罪ナリ」と言ふ如く良心に對し聊かの瑕瑾微犯も皆罪なりとなす道德観は宗教としては最高の價値を有するものである。

然しながら基督教はこの犯したる罪を拂拭し能はざるものであるとはなきぬこの犯したる罪を悔悟し懺悔して良心に立ち帰れば罪は消滅するものであると信する点に於て亦を卓越して居る、是れ即ち人格を高上せしむる所以であるからである。

然しながら基督教は國家を超越したる宗教でありゴツド以外の一切の人は平等であるが故に神道の如き天皇を現人神として崇し人間一切の努力を天皇に捧

いふ忠なる道徳観念を否定し又ゴツドを自己の父となすが故に自己を生みたる父母に對する敬愛の念を冷却し神道に於けるが如き祖先を崇敬し父母を敬愛する存なる道徳観念を冷却するものであるが故に我國の宗教としては不適當である。

第六節 批判の綜合

基督教は道徳の實踐を高調し人類愛を力説せる道徳教であつて優秀なる宗教である、且つ順入り易く且つ修め易き宗教であつて是の點に關して佛教の入り難く修め難きに比し宵壤の差があり且つ宗教に對し犧牲的精神を吹鼓し殉教を以て榮光と信する點に於て非常なる弘通力傳播力を持つる宗教である。

然しながら是の宗教は人以外にゴツドなる絶対位之神を立て而してこのゴツト以外に於ける一切の人は平等であるとす平等觀の上には立つ道徳観念は我等の如き祖先を崇敬し天皇を尊敬し父母を敬愛する差別観を有する道徳観念と一致しないが故に是の宗教を我國に弘通傳播することは我が國民の道徳観念を破

壞し我が國礎を傾けるものであるが故に國家主義を以て立つ我等より見れば是の宗教は頗る危険であらねばならぬ。

又是の宗教が「ゴツド」以外の個人の自由意志を尊重し且つ「ゴツド」以外に服従すべきものなしとする觀念は國家の政治に於て民主主義政治の思想を鼓吹するが故に我國の如き君主政治を根本とし萬世一系の天皇を仰ぐ國体を傷ぶものである、是れまた是の宗教が我國に取り危険なる所以である。

加之斯様なるゴツド以外に於て服従すべきものなしとする思想は猶太民族史に於て見るが如く國家の結合を薄弱ならしめ猶太國の滅亡したる素因をなし而して現今歐米の民主政治の國家組織が薄弱となり衰頽に傾しつゝある事實に於て之を見るも我等の如き國家主義に立つものより見れば國家を衰頽に導くものなるが故に是の宗教の弘通傳播は我國の爲め危険である、それ故に我國に於て宗教、道徳及び政治の三方面を有する神道を優るとなし、神道を以て國民の宗教をらしむるの必要を力説せんとするものである。

いなる忠なる道德觀念を否定し又ゴツドを自己の父となすが故に自己を生みたる父母に對する敬愛の念を冷却し神道に於けるが如き祖先を崇敬し父母を敬愛する孝なる道德觀念を冷却するものであるか故に我國の宗教としては不適當である。

第六節 批判の綜合

基督教は道德の實踐を高誦し人類愛を力説せる道德教であつて優秀なる宗教である、且つ頗る入り易く且つ修め易き宗教であつて是の点に關して佛教の入り難く修の難きに比し宵壤の差があり且つ宗教に對し犧牲的精神を吹鼓し殉教を以て榮光と信する点に於て非常なる弘通力傳播力を有する宗教である。

然しながら是の宗教は人以外にゴツドなる絶対位の神を立て而してこのゴツド以外に於ける一切の人は平等であるとなす平等觀の上に立つ道德觀念は我等の如き祖先を崇敬し天皇を尊敬し父母を敬愛する差別觀を有する道德觀念と一致し得るか故に是の宗教を我國に弘通傳播することは我が國民の道德觀念を破

壞し我が國礎を損けるものであるが故に國家主義を以て立つ我等より見れば是の宗教は頗る危険であらねばならぬ。

又是の宗教が「ゴツド」以外の個人の自由意志を尊重し且つ「ゴツド」以外に服従すべきものなしとする觀念は國家の政治に於て民主主義政治の思想を鼓吹するが故に我國の如き君主政治を根本とし萬世一系の天皇を仰ぐ國体を傷ぶものである、是れまは是の宗教が我國に取り危険なる所以である。

加之斯様なゴツド以外に於て服従すべきものなしとする思想は猶太民族史に於て見るが如く國家の結合を薄弱ならしめ猶太國の滅亡したる素因をなし而して現今歐米の民主政治の國家組織が薄弱となり衰頽に傾しつゝある事實に於て之を見るも我等の如き國家主義に立つものより見れば國家を衰頽に導くものなるが故に是の宗教の弘通傳播は我國の爲め危険である、それ故に我國に於て宗教、道德及び政治の三方面を有する神道を優るとなし、神道を以て國民の宗教をらしむるの必要を力説せんとするものである。

に於て神なる觀念の大に異れるを見るのである而して是が日本民族の宗教をして多神教たらしむる所以である。

それ故に日本民族の信する神は天御中主神より以降總て子孫父子兄弟姉妹の關係を保つ神であつて孤立したる遊離したる神は存在しないのである勿論後世に至り他國の神や器物や悪靈をも祭つたが是は他の思想の混入よりしたる現象であつて、日本民族本來の思想ではないのである。

又佛敎に於ては眞理の探求に努め是の眞理を體得したるものを佛と稱し菩薩と稱し是に達せんこと希ふて居り基督敎に於ても神は全智全能であり絶対者であり天地の創造者となすが故に神は眞理に達したるものであるに反し我國に於ては神は理智の神ではなくして是を崇敬し是を崇拜すべき感情上の神である事實上の神であることは特に注意を要する点であるそれ故にゴツドの觀念と神の觀念とは根本的に異なるものである。

第二節 靈魂觀

日本民族は人は神の延長であり人の心は神の心の延長であると思ふるので

あると考ふるが故に人死すればその肉體は滅びてもその靈魂は再び神に復帰すと考ふるものである即ち人の心は神の心の一部分たるに過ぎないと考ふるが故である、而して神は天に存在するものと考ふるが故に人死すればその靈魂は神となりて天に赴くものであると考へたのである而して佛敎の如く再生することを考へざるものである又極樂又は地獄に行くことを考へざるものである、それ故に善惡と極樂地獄との如き因果關係を有せざるものと考ふるものである。

然しながら日本民族は現世に於て靈魂は人の心に宿り死後其の靈魂は神となりて天に帰るものであるとなすが故に心と靈魂とに大なる差別を附せずしてこれを同一視し而して現實界に於ける心即ち靈魂には和魂荒魂の二方面ありとし和魂は更に幸魂と奇魂の二種ありとなすものである、和魂は即ち眞善美の心であり而してその分化たる奇魂は統一包含の心であり幸魂は分裂發展の心であつて和魂の両面を表はすものであり而して荒魂は和魂に對して矛盾反對に對する猛き心であつて人は一面に於て和魂を有し他面に於て荒魂を有すると観するものである。

に於て神なる觀念の大に異なるを見うのである而して是が日本民族の宗教をして多神教たらしむる所以である。

それ故に日本民族の信する神は天御中主神より以降總て子孫父子兄弟姉妹の關係を保つ神であつて孤立したる遊離したる神は存在しないのである勿論後世に至り他國の神や毒物や悪靈をも祭つたが是は他の思想の混入よりしたる現象であつて、日本民族本來の思想ではないのである。

又佛敎に於ては眞理の探求に努め是の眞理を體得したるものを佛と稱し菩薩と稱し是に達せんこと希ふて居り基督敎に於ても神は全習全能であり絶対者であり天地の創造者となすが故に神は眞理に達したるものであるに反し我國に於ては神は理智の神ではなくして是を崇敬し是を崇拜すべき感情上の神である事實上の神であることは特に注意を要する点であるそれ故にゴツドの觀念と神の觀念とは根本的に異なるものである。

第二節 靈魂觀

日本民族は人は神の延長であり人の心は神の心の延長であると思ふもので

あると思ふるが故に人死すればその肉體は滅びてもその靈魂は再び神に復帰すると思ふものである即ち人の心は神の心の一部分たるに過ぎないと考ふるが故である、而して神は天に存在するものと思ふるが故に人死すればその靈魂は神となりて天に赴くものであると考へたのである而して佛敎の如く再生することを考へざるものである又極樂又は地獄に行くことを考へざるものである、それ故に善惡と極樂地獄との如き因果關係を有せざるものと思ふるものである。

然しながら日本民族は現世に於て靈魂は人の心に宿り死後是の靈魂は神となりて天に帰るものであるとなすが故に心と靈魂とに大なる差別を附せずしてこれを同一視し而して現實界に於ける心即ち靈魂には和魂荒魂の二方面ありとし和魂は更に幸福と奇魂の二種ありとなすものである、和魂は即ち眞善愛の心であり而してその分化たる奇魂は統一結合の心であり幸福は分裂發展の心であつて和魂の両面を表はすものであり而して荒魂は和魂に對して矛盾反對に對する猛き心であつて人は一面に於て和魂を有し他面に於て荒魂を有すると観するものである。

第三節 世界観

神道に於ては三種の世界を豫想して居る、第一は高天原であり、第二は豊葦原であり、第三は根の國である、是の三種の世界に關しては古來最多の解釋があるが我等の解釋する所では高天ヶ原は現在の天で安根の國は現在の地下で安豊葦原は現實の地上の世界である観るものである。

日本民族は古來理窟や理論に偏せずして事實そのものを直観するの特性を有するそれ故に諸種の面倒なる理窟を考へずして我等の頭上の天と我等の足下の地と我等が生活活動する地上の世界とを直観して高天原豊葦原根の國と區分するのである而して神は尊貴なるものであり崇敬すべきものであるが故に天にあり而して人は地上にありて生活活動し而して人死すれば是を地上に埋むるが故に地下たる根の國に行くものと解釋するのである。

後世の學者は天高原は理想の國であり、根の國は情實の國である如く解釋するは理窟であつて斯様な理窟は日本民族の故せざる所である、日本民族は理

窟を敬せずして直観によつて事實そのものを見るが故に高天ヶ原は理想の國にもあらずして寧ろ直観的に見る頭上の天を意味し根の國は情實の國ではなくして寧ろ直観的に見る地下の國と觀するに至當となすものである、而して是の三種の世界は空間的存在であつて佛教や基督教の如き過去現在未來の時間的存在でもなければ因果的存在でもなく唯に神は崇敬すべきものなるが故に天にあり人は活動するものなるが故に地上にあり人死すれば其靈魂は地下に眠ると考ふるのであるそれ故に地下に於て極樂を考ふるでもなく地獄を考ふるでもないのである。

第四節 人生観

神道は現實世界の外に高天原及び根の國を豫想するも佛教及び基督教の如く未來の國即ち地獄極樂等の觀念を有せざるが故に現實世界を以て最も重要なるものと觀し而してこの現實世界は樂しき善き美はしき世界であると觀するものである、豊葦原五百穂秋瑞穂國の極呼の如きはこの現實世界を稱賛し樂観した

るの稱呼であつて従て人生は佛教の如く苦ではなくして樂であり美であり善である。あると観ずるものである。

斯様な人生の樂觀は茲に生々發展の意氣を生し、總ての人は生産を以てその任となし、斯くの如くして、彌深の精神を發揮し得るのである。是れ日本民族が古來發展をなして未だ嘗て退歩せざる所以である。

第五節 道德觀

神道は眞實の心を以てその根本となすものであつて、是を眞心と稱する。眞心とは一に清き心、明き心、又は赤き心と稱するものであつて、詐らざる眞實の心である。汚れたる心、闇き心、黒き心の反対である。

是の眞實心は理論や理窟ではなくして事實その儘の心である。而して是の心を以てする行為を善となし、是の心に反する行為を惡となすものであつて、是に善惡の道德觀を生ずるのである。而して是の眞實心を以て神に奉仕し、神を恭敬し、神に服従するを善行為となし、是に反する行為を惡行為となすものである。

又神道は政治上の方面を有し、祭政一致即ち神の意を承けて政をなし、而して神の正系の人を天皇とし、現人神となして天皇を尊敬し、是に服従することを善行為となし、是に反するものを惡行為となすか故に、神道は天皇に對して、清明心即ち眞心を以て仕ふることを忠となし、我が國道德の大本となして居る。

是と同時に、神道は祖先を崇拜し、子孫を慈愛する強き感情を有する道なるが故に、神に奉仕し、神を恭敬するは善行為であるのみならず、父母に對しても、是を敬愛し、眞心即ち清明心を以て仕ふることを善行為となし、是を孝となし、忠と並ひて我國道德の大本となつて居る。

それ故に我國に於て、佛教又は基督教の如く、人の平等觀を有せず、天皇は即ち現人神であつて、我等臣民を超越せる絶對位のものであるとなし、又祖先及父母は我等の上に立つもの即ち神に近きものであるとの觀念の上に、是を尊敬し、是に服従するものであつて、差別觀を有することは、我等日本民族の強き感情に因するものである。是の点より見れば、佛耶二教の平等觀は我等より見れば、頗る冷酷なる人情なき觀察である。

佛敎及び基督教の如きは超國家宗教であり世界的宗教であるが故に是等の宗教は信仰と同時に道徳を鼓吹するものであるが毫も政治的意義を含有しない。然るに神道は日本民族の道であるが故に宗教道徳の二方面の外政治の方面を有する。

神道が有する政治方面の思想は我等の君主たる天皇を以て現人神へアラビトガミシとなし天皇を神として崇敬すると同時に是の現人神を中心として國民が國家的結合をなすことである。

是の思想は同時に天皇が行ふ政治は神の意を承け神の心を體して神の子孫たる人民を統治すると言ふ思想を包含する而して是を實行したるは我國太古に於ける祭政一致の政治であつた。

中古以來人文發達し且つ外國文化が渡來し政治組織發達し制度法令等發達をなしたるも我が國の歴代天皇の有し給ひたる祭政一致の思想は毫も變化するこ

となかつた斯くの如くして萬世一系の皇統が保維せられたのであつた。

斯の如く天皇は神意を以て神の子孫たる人民を統治せんとし人民は天皇を以て現人神と信じて是に奉仕せんとする神道思想は我が國家をして最も完全に且つ最も堅固に結合せしめ且つ絶へず發展せしめたる所以であり且つ我が國体の世界に冠絶する所以である。

是に反し「エホバ」以外のものには服従すべきものなしとなしたる猶太國が不完全なる國家結合の下に滅亡し「ゴッド」以外のものは縱て平等なりとなしたる欧米諸國が君主國を極めて民主國となし爲めに衰頽に傾きつゝあるの事實を見るとき我國の神道が民族の道とし國家の道として如何に卓越しあるやを見得るのである是れ我等が神道を鼓吹せんとする最大の理由である。

結 論

我等は既に佛敎及び基督教の梗概を述べ且つ是に對し忌憚なき批判を下し而して將來我が國民か信仰すべきは神道以外になきことを論斷しむ。然しなから

現今我國に於ては神道廢る振はずその信仰者も極めて少く我國至る所に存在する神社も國民より忘却せられて骨董物たり紀念物ならんとするの現代を見て轉た感慨に耐へざるものがある。

是に反し佛教は數百年來の階力により今猶ほ悔るべからざる勢力を有しその信仰者亦た頗る多く而して欧米より渡來したる基督教は徳川幕府の禁令解けて以來日猶ほ淡きに拘らず我國に於て頗る弘通傳播しその信仰者も年に増加しつつあるの現状にある而かも是の二教か我が國體と一致せず我が國民道徳と背馳するものであることは既に縷述したる通りである。

然るに神道は日本民族か生みたる純真なる道である太古に於て神道は宗教であり道徳であり政治であつたが中古儒佛二教の影響を受け塵垢是を汚し雲霧是を掩ふたが明治維新以後復古精神により神道は日本民族の宗教であり道徳であり政治であらねばならぬ。然しながら明治以後我國に輸入せられたる歐米思想の爲め神道は再び雲霧を被り宗教思想政治經濟各方面に於て拂拭すべからざる弊害を生し殆んど救ふべからざるの狀態となつた而して是を匡救するの道は唯だ我日本民族本來の面目に復歸するあるのみである。

日本は神人合一の國家であり誠心一貫の國家であり君民一体の國家である、それ故に日本本來の面目に復歸するには是を宗教方面より見るも是を政治方面より見るも神道を振興することを以て第一義とせねばならぬ然るに現今に於て我國の神道は毫も振はず國家か外敵に直面し國家か危急に傾するも毫も意とせず殆んど睡眠状態にあることは我等の思ひ得ざる所以である。

是に於てか我等は神道諸家が共に覺醒し大に奮起することを望まざるを得ぬ斯の如くして我國の純真なる神道を大に吹鼓し傳道し布教し是をして國民の宗教たらしめ國民の道徳たらしめ國民の政治たらしめなければならぬ予が多年の研究を発表して説述する所以のもの實に是の微衷に外ならぬものである。

終

印刷所
神田・三崎町二の一
昭和騰寫堂
電話九段三八五六番